

甲斐市文化財調査報告書 第6集  
(山梨県)

# 松ノ尾遺跡 11

民間宅地開発に伴う平安時代・中世の発掘調査報告書

2006

株式会社 ディー・プラン  
甲斐市教育委員会

## 序 文

甲斐市には、山梨県最古の窯跡である「天狗沢窯跡」をはじめ、7世紀の群集墳である「赤坂台古墳群」、中世民間信仰の好例とされる経筒が出土した「塔之越経塚跡」、日本の治水事業の基礎とされる「竜王川除（信玄堤）」など甲斐市はもとより、山梨県史を解明する上でも大変重要な遺跡が多く残されております。

しかし、県都甲府市に隣接する本市は近年人口の急増が著しく、宅地造成工事や大型商業施設の建設など多くの開発事業が進み、本市教育委員会としましても埋蔵文化財を保護するための緊急発掘調査の対応が増加しております。

この「松ノ尾遺跡」は、縄文時代から室町時代までの人々の生活が凝縮された遺跡で、とくに、古墳時代から平安時代にかけては、この地が本県でも最も繁栄した地域の一つであったことがこれまでの発掘調査によって明らかになってきております。

今回報告する松ノ尾遺跡第11次調査は、宅地造成工事の原因とする緊急発掘調査であり、本書はその調査成果をまとめたものであります。

今後は、調査で得られました多くの成果を後世へ伝えるとともに、調査研究、教育普及の資として多くの皆様 に幅広く活用していただけるよう努めてまいります。

終わりに、株式会社ディー・プランの文化財保護に対する深いご理解のもと調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に感謝申し上げます。序といたします。

平成18年3月

甲斐市教育委員会

教育長 中 込 豊 弘

## 例 言

1. 本書は、山梨県甲斐市中下条に所在する松ノ尾遺跡の第11次調査をまとめた発掘調査報告書である。
2. 本調査は、株式会社ディー・プランによる宅地造成工事に先立ち実施した。
3. 調査は、平成16年度に数島町教育委員会（当事）によって試掘調査を実施した。本調査は同年度に、株式会社日本窯業史研究所から調査員の派遣を受け、数島町文化財調査会（当時）が行った。  
整理、分析調査は、甲斐市教育委員会及び同教委が委託した株式会社日本窯業史研究所によって平成17年度に実施した。
4. 本書の執筆は、第1章を大高正之（甲斐市教委）、その他を中山哲也（株式会社日本窯業史研究所）が担当した。  
編集を三輪孝幸（株式会社日本窯業史研究所）、校閲は大高が行った。  
遺構写真の撮影は中山、遺物は河野一也（株式会社日本窯業史研究所）が撮影した。出土遺物の実測、拓本は須長愛子（甲斐市教委）の協力を得た。
5. 本書に係る出土遺物及び記録図面、写真などは甲斐市教育委員会に保管してある。
6. 調査に係る費用は、株式会社ディー・プランが負担した。
7. 調査組織は次のとおりである。

### 調査組織

調査指導・主管	数島町教育委員会（平成16年8月まで） 甲斐市教育委員会（平成16年9月から）
調査指導担当者	大高正之（甲斐市教育委員会）
調査担当者	中山哲也（株式会社日本窯業史研究所）
調査事務局	数島町文化財調査会（平成16年9月まで） 甲斐市教育委員会（平成17年4月から）

8. 調査作業参加者・遺物実測、拓本、トレース図作成者  
青山制子、飯室久美恵、石川弘美、長田由美子、小林明美、高添美智子、堤 吉彦、保延 勇  
望月典子、森沢篤美（敬称略）

## 凡 例

1. 挿図の北は磁北を示し、レベルは標高を表している。
2. 挿図の縮尺は遺構（住居跡・土坑・溝1/60、カマド1/30）、出土遺物は1/2を基本とし、そのほかは図に記載した。なお、遺構挿図に関してはスケールを挿入しているが、出土遺物挿図に関しては縮尺が不統一なため、あえてスケールを省いた。
3. 今次調査における地表面から遺構確認面までの層序（I～V層）は第4図に明記し、各遺構土層断面図では省略した。
4. 遺物番号は本文・挿図・観察表・図版で統一してある。
5. 遺物観察表中、（・・）が復元、残・が残存の寸法を表す。
6. 遺構挿図中、●土器・土師器・土師質土器、■石製品、★金属製品の出土位置を表し、■は焼土を示している。
7. 遺物挿図中、断面が白抜きは土器・土師器・土師質土器で、■は須恵器・瓦、■は中世陶器・灰輪陶器・白磁である。

# 本文目次

第1章 遺跡をとりまく環境	1
1. 遺跡の立地と環境	1
2. 松ノ尾遺跡の概要	1
第2章 遺構と遺物	5
1. 竪穴住居跡	5
2. 竪穴状遺構	30
3. 土坑	31
4. 溝	36
5. ビット群	38
6. 遺構外出土遺物	41
第3章 まとめ	42

# 挿図目次

第1図 松ノ尾遺跡と周辺の遺跡	第23図 10号住居跡出土遺物
第2図 調査区位置図	第24図 11・12号住居跡
第3図 調査区全体図	第25図 11・12号住居跡カマド
第4図 1号住居跡	第26図 11号住居跡出土遺物
第5図 1号住居跡出土遺物	第27図 12号住居跡出土遺物
第6図 2号住居跡	第28図 13号住居跡
第7図 2号住居跡出土遺物	第29図 13号住居跡出土遺物
第8図 3・9号住居跡	第30図 14号住居跡
第9図 3号住居跡出土遺物	第31図 14号住居跡出土遺物
第10図 4号住居跡	第32図 15号住居跡・出土遺物
第11図 4号住居跡出土遺物	第33図 1号竪穴状遺構・出土遺物
第12図 5・6号住居跡	第34図 土坑(1)
第13図 5号住居跡出土遺物	第35図 土坑(2)
第14図 6号住居跡出土遺物	第36図 土坑出土遺物
第15図 7号住居跡	第37図 1・2号溝
第16図 7号住居跡出土遺物(1)	第38図 2号溝出土遺物
第17図 7号住居跡出土遺物(2)	第39図 ビット群(1)
第18図 7号住居跡出土遺物(3)	第40図 ビット群(2)
第19図 8号住居跡	第41図 遺構外出土遺物
第20図 8号住居跡出土遺物	
第21図 9号住居跡出土遺物	
第22図 10号住居跡	

## 表 目 次

第1表	1号住居跡出土遺物観察表	第14表	14号住居跡出土遺物観察表
第2表	2号住居跡出土遺物観察表	第15表	15号住居跡出土遺物観察表
第3表	3号住居跡出土遺物観察表	第16表	1号竪穴出土遺物観察表
第4表	4号住居跡出土遺物観察表	第17表	6号土坑出土遺物観察表
第5表	5号住居跡出土遺物観察表	第18表	8号土坑出土遺物観察表
第6表	6号住居跡出土遺物観察表	第19表	12号土坑出土遺物観察表
第7表	7号住居跡出土遺物観察表	第20表	15号土坑出土遺物観察表
第8表	8号住居跡出土遺物観察表	第21表	20号土坑出土遺物観察表
第9表	9号住居跡出土遺物観察表	第22表	2号溝出土遺物観察表
第10表	10号住居跡出土遺物観察表	第23表	ピット計測表
第11表	11号住居跡出土遺物観察表	第24表	遺構外出土遺物観察表
第12表	12号住居跡出土遺物観察表	第25表	住居跡出土遺物の属性
第13表	13号住居跡出土遺物観察表		

## 図 版 目 次

図版1	A区全景（東から） A区全景（西から） B区全景（西から） A区全景（北東から） 3・9号住居跡全景（北東から） 4号住居跡全景（北から） 5・6号住居跡全景（西から） 7号住居跡全景（北から）
図版2	8号住居跡全景（西から） 11号住居跡全景（西から） 12号住居跡全景（西から） 13号住居跡全景（北から） 14号住居跡全景（南から） 8号住居跡カマド（北東から） 11号住居跡カマドC（東から） 12号住居跡カマド（北から）
図版3	4号住居跡遺物出土状況（西から） 4号住居跡遺物出土状況（南から） 5号住居跡遺物出土状況（北から） 7号住居跡遺物出土状況（北から） 3号土坑全景（北から） 6号土坑全景（東から） 15号土坑全景（北から） 1号溝全景（南から）
図版4	1・2・4～8・11号住居跡、20号土坑出土遺物
図版5	1・3・4～9号住居跡出土遺物
図版6	1・4・7号住居跡出土遺物
図版7	1・4・5・7・8・11・13号住居跡、2号溝、遺構外出土遺物
図版8	1・4・6・7号住居跡、6号土坑、遺構外出土遺物
図版9	2・5～7・10・12号住居跡、15号土坑、遺構外出土遺物

# 第1章 遺跡をとりまく環境

## 1. 遺跡の立地と環境 (第1図)

甲斐市は甲府盆地の北西部に位置し、甲府市の西側に隣接する。市内は地形の特徴から大きく4つの地域に分けることができる。

まず、市内北部は、茅ヶ岳、曲岳、太刀岡山など標高千メートルを越す山々が点在する山岳地帯で、急峻な地形を呈している。市西部は、茅ヶ岳の火山活動によって形成された台地が広がり、通称『登美台地』『赤坂台地』と呼ばれる茅ヶ岳南麓の丘陵地域となる。市東部は、奥秩父山系の金峰山を源とする荒川が流れ、この荒川によって形成された扇状地となる。市南部は、南アルプス鯉岳を源とする釜無川(富士川)によって形成された扇状地である。

甲斐市は北部から中部にかけて山間地、丘陵地帯となり、南部は市の東西を流れる荒川、釜無川によってできた扇状地となる。市内標高は、最高が北部の1,703.5m、最低が南部の264.9mと標高差1,400mを超え、バリエーションに富んだ環境である。

報告する松ノ尾遺跡は市東部にあり、荒川によって形成された扇状地の扇頂部末端に位置し、微高地上に営まれた集落遺跡である。標高は290mを測る。

## 2. 松ノ尾遺跡の概要 (第2・3図)

本遺跡は、甲府市との境界を流れる荒川と茅ヶ岳火山によって形成された通称「登美台地」との間に位置する。この台地と荒川の間(旧敷島町南部)には、南北に延びる2本の微高地があり、本遺跡は東側微高地上に営まれている。平成6年(1994)にはじめて調査が実施され、今時まで13回の本調査が行われており、遺跡範囲は現在までのところ南北700m、東西400mの広がりをもつことが明らかになった。今後の調査によって、さらに広範囲になることが予想される。

本遺跡は、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、鎌倉、室町の各時代に亘る複合遺跡であり、遺跡の広い範囲で古墳時代後期の住居が発見されていることから、同時期の集落が大きく展開していることが明らかとなってきている。また、遺跡中央を東西に横断する都市計画街路愛宕町下条線の周辺から南側にかけては奈良、平安時代前半(8~10世紀代)の住居跡など遺構群が出土している。そして、愛宕町下条線周辺から北側にかけて平安時代後半(11、12世紀)から中世にかけての遺構群が主に確認されている。

住居跡は、各時代を通してこれまでに120軒を超えており、特に古墳時代後期と平安時代全般にかけての遺構が顕著にみられる。住居跡と対比して掘立柱建物跡の件数は極僅かであり、本遺跡の特徴ともいえる。中世に入ると、掘立柱建物となる可能性があるピット群が確認され始めてきており、さらに土壌羣も近年の調査によって確認されている。

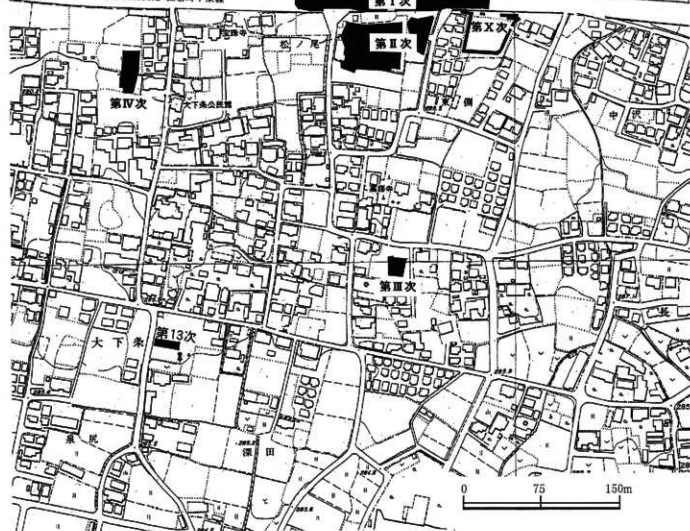
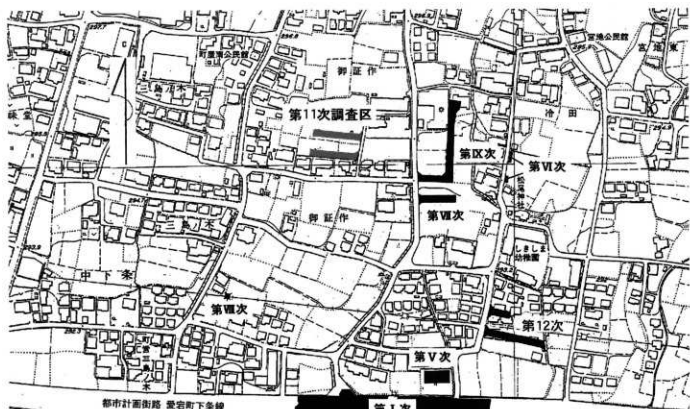
特に古代の遺物に限って見ると、遺構の分布傾向と同様に古墳時代後期の遺物は広範囲に認められる。奈良、平安時代では、土師器、須恵器、灰釉陶器をはじめ膨大な量の遺物が出土している。特殊なものについてみると、塑像の螺髪、布目瓦、4回体分の円面硯、緑釉陶器(碗、皿、耳皿、椀)、壺G、貿易陶磁器の白磁、青白磁、青磁類(碗、皿、水注、壺類)、さらに金属製品では帯金具(鉄製釵具、銅製蛇尾具)、銅碗片、銅製連繫壺金具、小金銅仏2軀が挙げられる。

以上のように、松ノ尾遺跡は、縄文時代から室町時代までの広範囲に及ぶ複合遺跡であるが、古墳時代から平安時代の一つの隆盛を向かえることが遺構、遺物から看守できる。特に7世紀後半から11世紀にかけての出土遺物を見ると、一般集落とは考え難く本県古代史を解明する上でも重要な遺跡である。



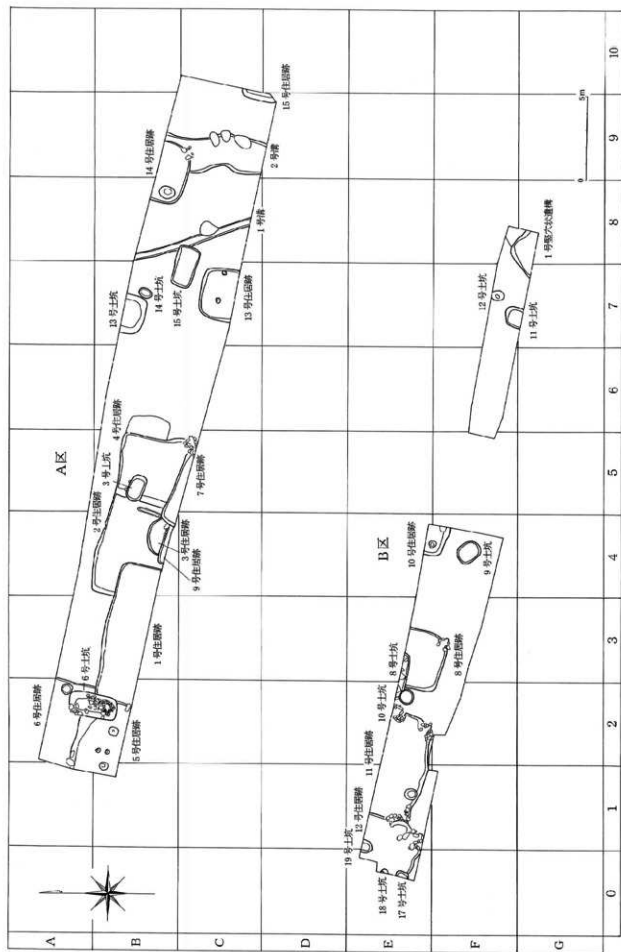
- 1 山形県  
 2 山形県  
 3 山形県  
 4 山形県  
 5 山形県  
 6 山形県  
 7 山形県  
 8 山形県  
 9 山形県  
 10 山形県  
 11 山形県  
 12 山形県  
 13 山形県  
 14 山形県  
 15 山形県  
 16 山形県  
 17 山形県  
 18 山形県  
 19 山形県  
 20 山形県  
 21 山形県  
 22 山形県  
 23 山形県  
 24 山形県  
 25 山形県  
 26 山形県  
 27 山形県  
 28 山形県  
 29 山形県  
 30 山形県  
 31 山形県  
 32 山形県  
 33 山形県  
 34 山形県  
 35 山形県  
 36 山形県  
 37 山形県  
 38 山形県  
 39 山形県  
 40 山形県  
 41 山形県  
 42 山形県  
 43 山形県  
 44 山形県  
 45 山形県  
 46 山形県  
 47 山形県  
 48 山形県  
 49 山形県  
 50 山形県  
 51 山形県  
 52 山形県  
 53 山形県  
 54 山形県  
 55 山形県  
 56 山形県  
 57 山形県  
 58 山形県  
 59 山形県  
 60 山形県  
 61 山形県  
 62 山形県  
 63 山形県  
 64 山形県  
 65 山形県  
 66 山形県  
 67 山形県  
 68 山形県  
 69 山形県  
 70 山形県  
 71 山形県  
 72 山形県  
 73 山形県  
 74 山形県  
 75 山形県  
 76 山形県  
 77 山形県  
 78 山形県  
 79 山形県  
 80 山形県  
 81 山形県  
 82 山形県  
 83 山形県  
 84 山形県  
 85 山形県  
 86 山形県  
 87 山形県  
 88 山形県  
 89 山形県  
 90 山形県  
 91 山形県  
 92 山形県  
 93 山形県  
 94 山形県  
 95 山形県  
 96 山形県  
 97 山形県  
 98 山形県  
 99 山形県  
 100 山形県

第1図 松ノ尾遺跡と周辺の遺跡



第2図 調査区位置図 (■は第11次調査区)





第3图 调查区全体图

## 第2章 遺構と遺物

### 1. 竪穴住居跡

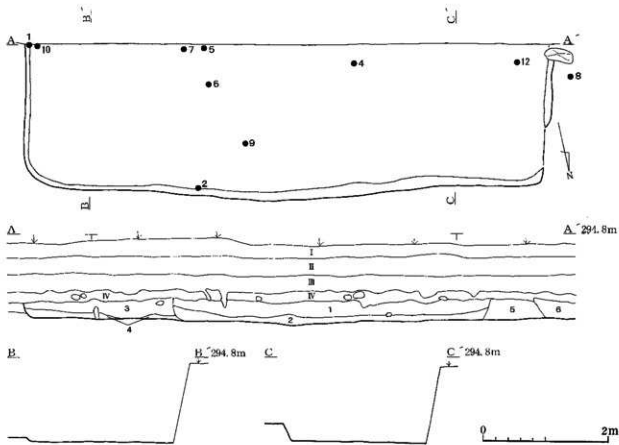
#### 1号住居跡 (第4・5図、第1表、図版4~8)

本跡はA地区西側のB-1~3区に位置する。また北壁が直線状に東西に連なるため当初1軒と思われたが、南壁土層の観察から時期の異なる2軒が重複するものと思われる。そのため東側の住居跡を1b号住居跡、西側を1a号住居跡とした。両者とも住居跡の北側を検出したが、南側は調査区外に延びていた。本跡は2・5号住居跡と重複しており、2号住居跡→1b号住居跡→1a号住居跡→5号住居跡の順で新しくなると考えられる。

検出できた部分の規模は、西側の1a号住居跡は東西5.0×南北2.3mで、カマドは確認できなかった。住居跡の壁高は8~25cmで床面は平坦であったが、周溝・柱穴・炉跡等は検出できなかった。

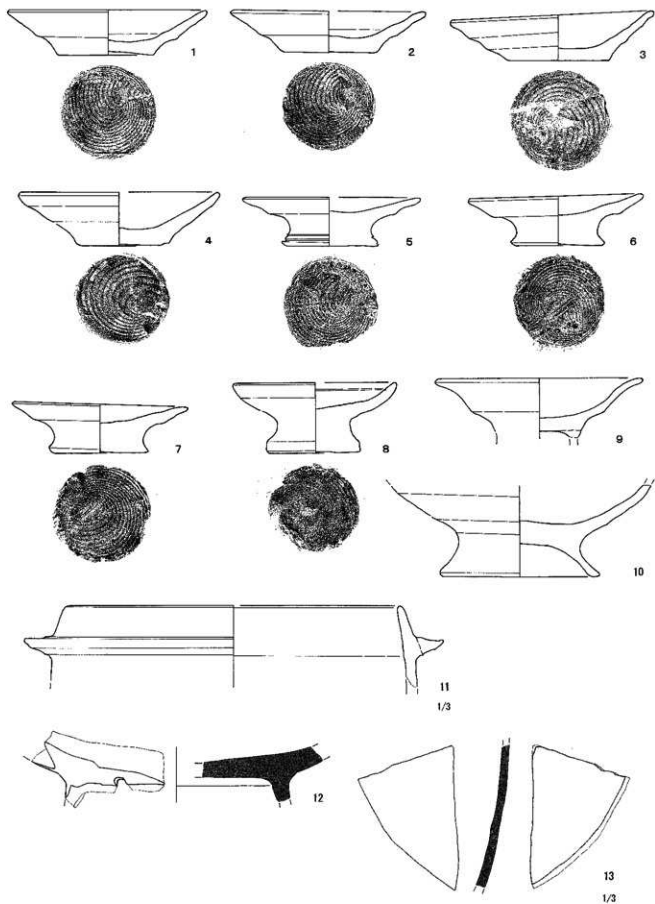
東側の1b号住居跡は東西2.4×南北2.3mで、カマドは確認できなかった。住居跡の壁高は8~25cmで床面は平坦であったが、周溝・柱穴等は認められなかった。1a号住居跡と1b号住居跡の重複部でも掘り込み時の段差等は認められなかった。

遺物は土師質土器を主とし1a号住居跡東側と中央付近の埋積土中から出土した。また1b号住居跡の遺物は東壁付近の埋積土中から出土した。



- |   |   |
|---|---|
| <p>I 盛土 (暗灰褐色土)<br/>             II 耕作土 (暗赤茶褐色土・緑まり土、粘性あり、小砂粒5~10mm、赤褐色土粒1~2mm少量)<br/>             III 暗灰褐色土 (緑まり土、粘性あり、灰白色粒1~5mm少量)<br/>             IV 緑茶褐色土 (緑まり中、粘性弱、やや砂質、小砂粒2~3mm、灰白色粒2~3mm少量)<br/>             V 黒褐色土 (緑まり中、粘性弱、やや砂質、小砂粒5~10mm、灰白色粒2~3mm少量)</p> | <p>1号住居跡<br/>             1 暗赤褐色土 (緑まりやや弱い、灰白色粒1~2mm少量、炭化物粒2~3mm少量)<br/>             2 緑茶褐色土 (緑まりやや弱い、灰白色粒1~2mm少量、炭化物粒2~3mm少量)<br/>             3 暗赤褐色土 (緑まりやや弱い、灰白色粒2~3mm少量、炭化物粒3~5mm少量)<br/>             4 暗赤褐色土 (緑まりやや弱い、灰白色粒2~3mm少量、炭化物粒2~3mm少量)<br/>             5 暗赤褐色土 (緑まりやや弱い、灰白色粒1~2mm少量、炭化物粒2~3mm少量)<br/>             6 5号住居跡カマド</p> |
|---|---|

第4図 1号住居跡



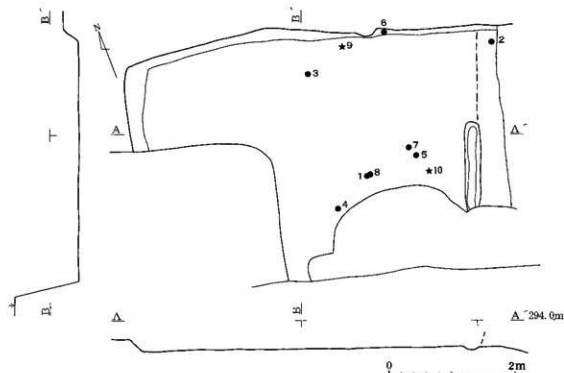
第5图 1号住居跡出土遺物

第1表 1号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師質土器・小皿	10.2	5.0	2.4	暗茶色	良	きめが細かい・金雲母・赤色粒子	ロクロなどで 底部糸切痕 内外面スズ付着
2	土師質土器・小皿	(10)	4.8	2.2	暗茶色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
3	土師質土器・小皿	10.4	5.2	2.6	黒茶色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
4	土師質土器・小皿	(10.3)	4.2	2.85	暗茶色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
5	土師質土器・小皿	(9.3)	5.0	2.6	暗茶色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
6	土師質土器・小皿	8.9	4.5	2.7	茶色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
7	土師質土器・小皿	9.0	4.8	2.75	暗茶色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
8	土師質土器・柱状高台小皿	(8.4)	4.6	3.7	暗茶色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
9	土師器・脚高台杯	10.6		残3.1	暗茶色	良	きめが細かい・金雲母	杯と脚の境に糸切痕
10	土師質土器・脚高台杯		7.8	残4.8	暗茶色	良	きめが細かい・金雲母	
11	土師質土器・羽釜	(26.0)		残6.4	暗茶色	良	きめが細かい・金雲母・長石	
12	中世陶器			残2.9	灰白色	良	緻密	脚部のつけ根に1ヶ所穿孔あり
13	陶器(瀬戸・美濃産)・壺			残11.3	黄灰色	良	きめが細かい・金雲母	灰釉

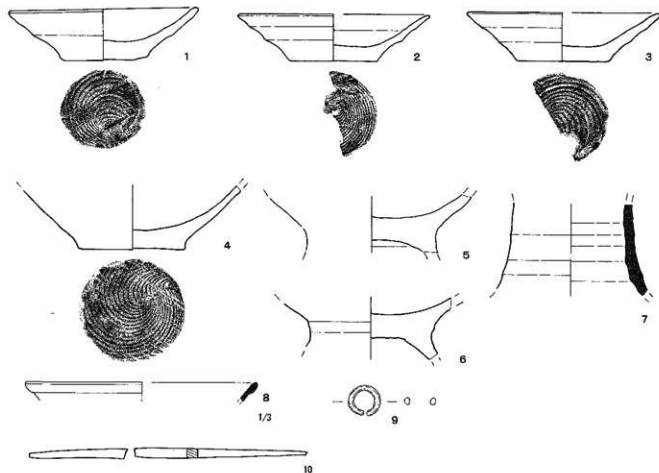
## 2号住居跡 (第6・7図, 第2表, 図版4・9)

本跡はA区西側のB・4区に位置する。西側が1号住居跡、東側を4号住居跡、南側が3・7・9号住居跡と重複していた。確認できたのは住居跡北側のみで、南側は調査区外に延びていた。土層断面の観察からは、この住居跡に伴う埋積土が黒褐色土であることから、重複する住居跡のなかで本跡が最も古くとなると考えられる。4号住居跡との新旧関係は不明であるが、2号住居跡→3号住居跡→9号住居跡→7号住居跡の順で新しくなると考えられる。東側が4号住居跡と重複するため東壁がはつきりしないが、確認できた規模は東西(北壁)5.98×南北(住居中央)3.9m程で、調査区外に延びているため平面形は不明である。住居跡の壁高は20~25cm、床面は平坦で、東側に長さ1.4m、幅24、深さ5~6cm程の周溝が残存しておりこの付近が東壁であったと思われる、またカマド・周溝・柱穴等は認められなかった。



第6図 2号住居跡

遺物は北壁際から径1.7cm程の環状の銅製品が出土し、また、床面から土師器等が出土した。環状の銅製品は形状的には古墳時代の耳環と思われるが、住居跡の時期を考慮に入れば仏具等の他のものの可能性も考えられる。



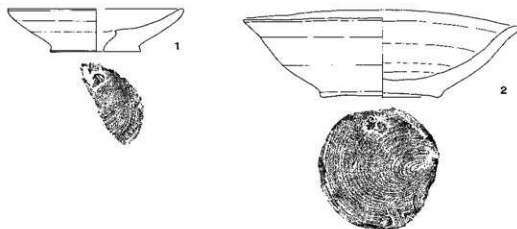
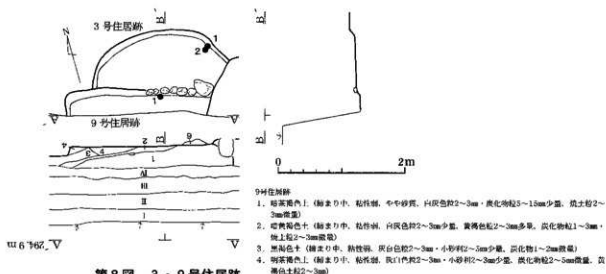
第7図 2号住居跡出土遺物

第2表 2号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師器・小皿	9.6	3.5	2.8	淡橙色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなで 底部糸切痕
2	土師器・小皿	(9.8)	(4.6)	2.5	淡茶褐色	良	赤色粒子	ロクロなで 底部糸切痕
3	土師器・小皿	(10.0)	(4.8)	2.55	茶褐色	良	緻密	ロクロなで 底部糸切痕
4	土師器・杯		5.5	残3.4	淡茶褐色	良	密 金雲母、赤色粒子	ロクロなで 底部糸切痕
5	土師器・脚高台台杯			残3.0	明茶色	良	きめが細かい・金雲母、長石、赤色粒子	
6	土師器・脚高台台杯			残3.3	暗茶褐色	良	密 金雲母、赤色粒子	
7	陶器・長頸壺?			残4.8		良		全面施釉
8	白磁・碗	(18.0)		残1.5	灰白色	良	きめが細かい	口縁折り返し ロクロなで
		全長	軽	厚さ	重さ		特徴	
9	銅製品・耳環	1.7	1.6	0.4	2.3g		銅無垢	
10	棒状鉄製品	14.14	0.97	0.70	11.8g			

### 3号住居跡 (第8・9図、第3表、図版1・5)

本跡はA区西側付近のB・4区に位置する。2号住居跡南側に掘り込まれており、南側に9号住居跡が東側に7号住居跡が重複している。新旧関係は2号住居跡→3号住居跡→9号住居跡→7号住居跡の順で新しくなると考えられる。確認できたのは北西隅付近のみで大半が調査区外に延びていた。確認できた規模は東西(北壁)1.9×南北(西壁)0.65m程で、調査区外に延びており平面形は不明である。西壁と北壁がかなり湾曲しており円形の平面の可能性もあるが、切り合いからは平安時代の遺構と考えられる。住居跡の壁高は3~11cmで、床面には10~20cm程の川原石が見られたが、カマド・周溝・柱穴等は認められなかった。



第3表 3号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師質土器・小皿	(9.0)	(4.8)	2.3	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
2	土師質土器・杯	14.2	6.0	4.6	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕

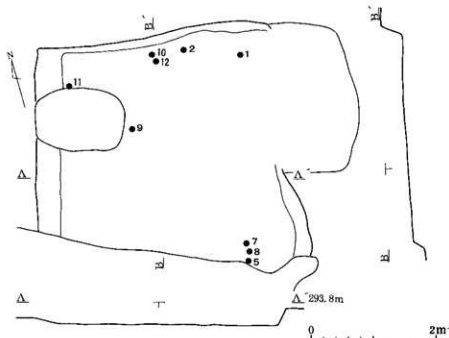
4号住居跡 (第10・11図、第4表、図版1・3～8)

本跡はA区西側付近のB-5区に位置する。本跡は西側に2号住居跡が、南側に7号住居跡が、西側に中世の土坑(3号土坑)が重複している。調査区南壁土層断面の観察により7号住居跡が後出するが、2号住居跡との新旧関係は不明である。本跡も調査区の南側に延びていると思われるが、7号住居跡の削平を受けていた。また東壁の一部が攪乱を受けていた。確認できた規模は東西(北壁)3.72×南北(西壁)2.95m程で、平面形は不明である。住居跡の壁高は13～23cmで、カマド・周溝・柱穴等は認められなかった。

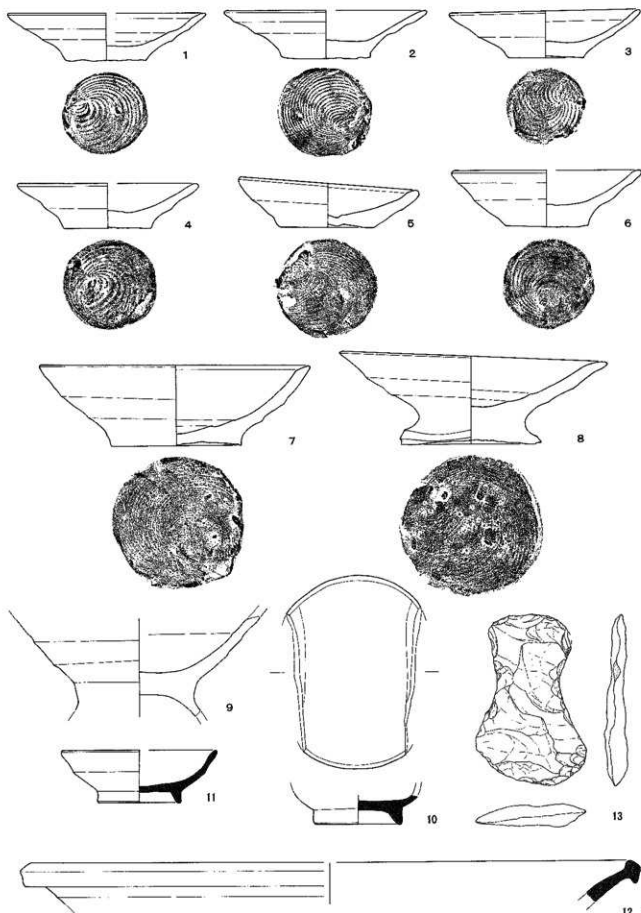
遺物は上師器小皿、十師質土器杯・柱状高台付皿等が出上した。

第4表 4号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師器・小皿	(10.2)	4.2	2.5	橙色	良	きめが細かい・赤色、白色粒子・雲母	ロクロなで 底部糸切痕
2	土師器・小皿	(10.3)	4.7	2.55	赤褐色	良	きめが細かい・赤色、白色粒子	ロクロなで 底部糸切痕 内面一部スス付着
3	土師器・小皿	9.8	3.9	2.55	褐色	良	きめが細かい・赤色粒子・長石・雲母	ロクロなで 底部糸切痕
4	土師質土器・小皿	(9.2)	4.5	2.35	にぶい褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなで 底部糸切痕
5	土師質土器・小皿	9.2	4.9	2.65	暗褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなで 底部糸切痕 内面一部スス付着
6	土師器・小皿	(9.7)	4.3	3.0	褐色	良	きめが細かい・金雲母・赤色、白色粒子	ロクロなで 底部糸切痕
7	土師質土器・杯	13.9	6.8	4.35	褐色	良	きめが細かい・金雲母・赤色、黒色粒子	ロクロなで 底部糸切痕
8	土師質土器・柱状高台付皿	13.7	7.4	4.95	赤褐色	良	きめが細かい・赤色、白色粒子・金雲母	ロクロなで 底部糸切痕
9	土師器・高台付杯	-	-	残5.2	暗褐色	良	きめが細かい・赤色、白色粒子	ロクロなで
10	灰釉陶器・耳皿	-	4.4	残2.7	灰白色	良	きめが細かい	ロクロなで、内面に灰釉、付け高台、高台内に糸切痕
11	灰釉陶器・小碗	(8.1)	4.15	2.75	灰白色	良	きめが細かい	ロクロなで、内面の一部に灰釉がかかっている
12	中世陶器・壺	(46.8)	-	残3.2	灰白色	良	きめが細かい	ロクロなで
13	石器・打斧	全長	最大幅	厚さ			石材	
		9.1	5.8	1.3				



第10図 4号住居跡



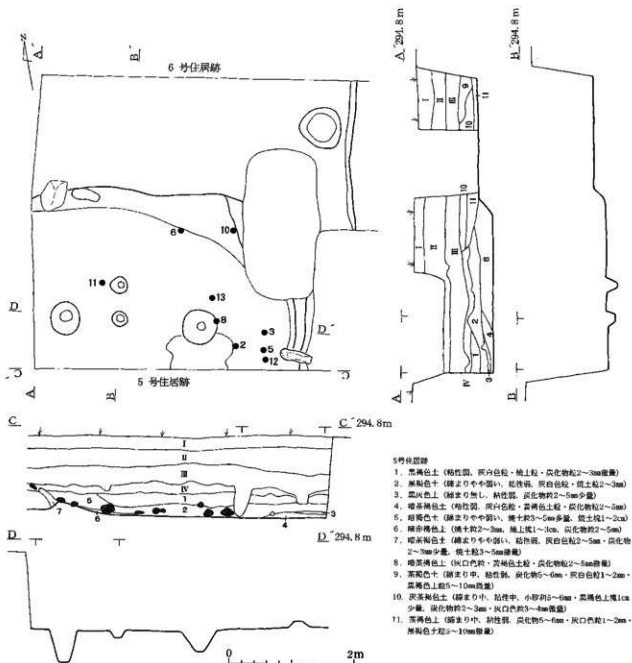
第11图 4号住居跡出土遺物



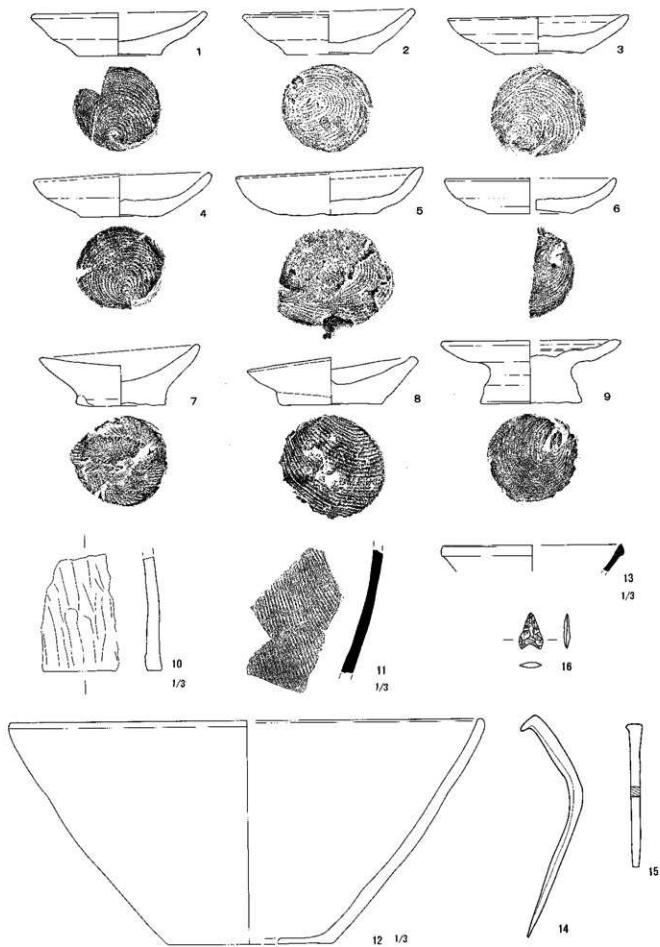
5号住居跡 (第12・13図、第5表、図版1・3~5・7・9)

本跡はA区西端のA・B・1・2区に位置する。本跡は東側に1号住居跡が、北側に6号住居跡が、北東隅付近に中世の土坑(6号土坑)が重複している。調査区の南西端に位置するため、確認できたのは住居跡の北東側のみである。新旧関係は1号住居跡→6号住居跡→5号住居跡の順で新しくなると考えられる。確認できた規模は東西(カマド北側)4.1×南北(住居跡西端)2.9m程で調査区外に延びるため平面形は不明であるが、主柱穴2口と東壁でカマドを確認した。カマドは南側に調査区外に延びており、調査し得たのは北側のみで壁の外側へ30cm程掘り込んで構築されていた。カマド北袖には袖芯に使われた長さ50、幅15cm程の川原石がみられた。住居跡の壁高は3~17cm程で、主柱穴は東西に2口が並んでいた。柱穴は西側が径52×48、深さ50cm程、東側が径52×54、深さ31cm程で東柱穴の南側には硬化面がみられた。柱穴の間に、南北に2口の小さな穴(北側が径28、深さ17cm、南側が径26、深さ11cm)が認められた。また床面は平坦で周溝は認められなかった。

遺物は土師質土器等が埋積土中から出土した。



第12図 5・6号住居跡



第13圖 5号住居跡出土遺物

## 6号住居跡 (第12・14図、第6表、図版1・4・5・8・9)

本跡はA区西端のA・2区に位置する。本跡は南側に1・5号住居跡が、南東隅付近には中世の土坑(6号土坑)が重複している。住居跡の南東部を確認したが、大半は調査区外の西側に延びていた。新旧関係は1号住居跡→6号住居跡→5号住居跡の順で新しくなると考えられる。確認できた規模は東西(住居跡北側)2.98×南北(東壁)2.45m程で調査区外に延びるため平面形は不明である。東壁際には貯蔵穴と思われる径70×62、深さ17cm程の掘り込みが見られ、その北側に炭化物と焼上が散在していた。そのため調査区外の東壁にカマドが構築されていたと思われる。住居跡の壁高は15cmで、周溝・柱穴は認められなかった。

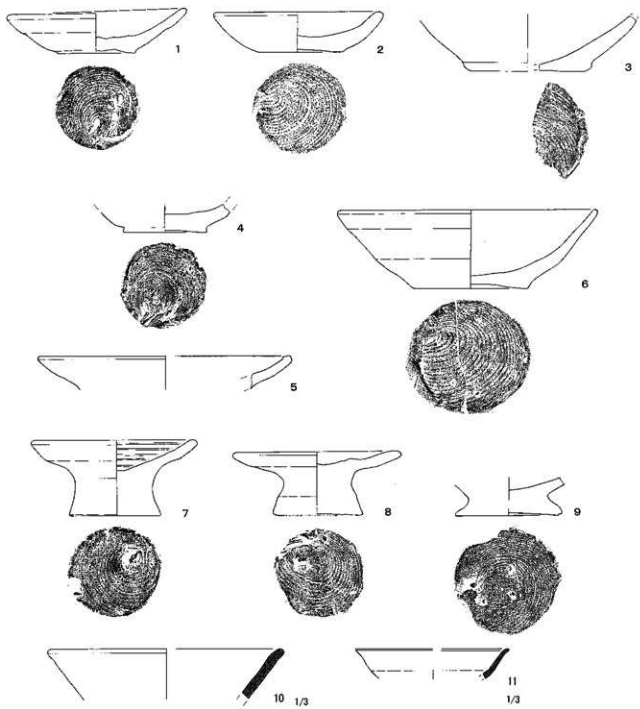
遺物は土師質土器小皿が床而付近くで出土した。

第5表 5号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴	
		口径	底径	器高					
1	土師質土器・小皿	(8.9)	(4.5)	2.4	明赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
2	土師質土器・小皿	8.6	4.4	2.4	にぶい赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
3	土師質土器・小皿	9.5	4.6	2.0	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
4	土師質土器・小皿	9.0	4.2	2.3	にぶい褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
5	土師質土器・小皿	9.6	5.2	2.4	にぶい赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
6	土師質土器・小皿	(8.8)	(4.5)	1.95	にぶい褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
7	土師質土器・小皿	8.2	4.7	3.2	黒褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
8	土師質土器・小皿	8.4	5.3	2.5	にぶい赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
9	土師質土器・柱状高台付皿	(9.4)	5.2	3.4	明赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
10	土師器・置きかまど	-	-	残9.0	にぶい褐色	良	きめが細かい・白色粒子	外面、ヘラなど	
11	須臾器・甕	-	-	-	灰色	良	きめが細かい・赤色、白色粒子	外面、タタキ目	
12	土師器・浅鉢	(37.0)	(13.0)	17.7	にぶい赤褐色	良	きめが細かい・赤色、白色粒子		
13	白磁・碗	(14.0)	-	残2.1	灰白色	良	きめが細かい	口縁折り返し	ロクロナで
		全長	幅	厚さ	重さ		石材		
14	釘	11.81	2.76	1.53	16.4g				
15	釘	7.62	1.09	1.04	12.9g				
16	石鏝	1.94	1.20	0.35			黒曜石		

第6表 6号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴	
		口径	底径	器高					
1	土師質土器・小皿	9.0	4.0	2.4	にぶい褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
2	土師質土器・小皿	8.6	4.5	2.2	にぶい黄褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
3	土師質土器・小皿	-	(6.0)	残3.0	褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
4	土師質土器・小皿	-	4.3	残1.5	褐色	良	きめが細かい・金雲母	底部系切痕	
5	土師質土器・皿	(13.0)	-	残1.8	にぶい赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	
6	土師質土器・杯	13.4	6.0	4.2	にぶい褐色	良	きめが細かい・金雲母、赤色粒子	ロクロナで	底部系切痕
7	土師質土器・柱状高台付皿	8.5	4.8	4.0	にぶい赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで	底部系切痕
8	土師質土器・柱状高台付皿	8.6	4.6	3.4	褐色	良	きめが細かい・金雲母、赤色粒子	ロクロナで	底部系切痕
9	土師質土器・柱状高台付皿	-	5.5	残2.0	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	底部系切痕	
10	中世陶器・鉢	(18.0)	-	残4.0	灰白色	良	きめが細かい	ロクロナで	
11	白磁・皿	(12.0)	-	残2.3	灰白色	良	きめが細かい	ロクロナで	

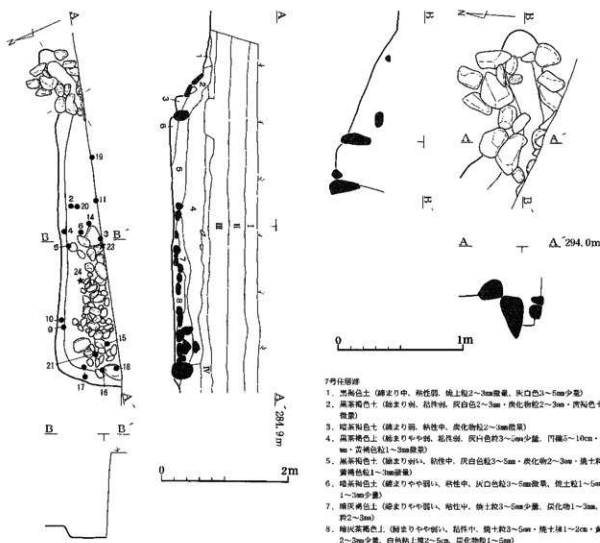


第14图 6号住居跡出土遺物

7号住居跡 (第15~18図、第7表、図版1・3~9)

本跡はA区西側付近のB・C・4・5区に位置する。本跡は北側に2・4号住居跡が、西側に3・9号住居跡が重複している。新旧関係は2・4号住居跡→3号住居跡→9号住居跡→7号住居跡の順で新しくなると考えられる。本跡は調査区外に延びており、確認できた規模は東西(北壁)4.2×南北(西壁)1.04m程で平面形は不明である。住居の北壁側を確認したが大半は南側の調査区外に延びており、カマドは住居跡の北東隅に施設されていた。カマドは北東隅を80cm程掘り込んで構築しており、径20~30cmの川原石を芯材として使用していた。本跡の埋積土中には炭土や径10~20cm程の河原石が多量に混入しており、人為的堆積と考えられる。住居跡の壁高は14~18cmで、周溝・柱穴は認められなかった。

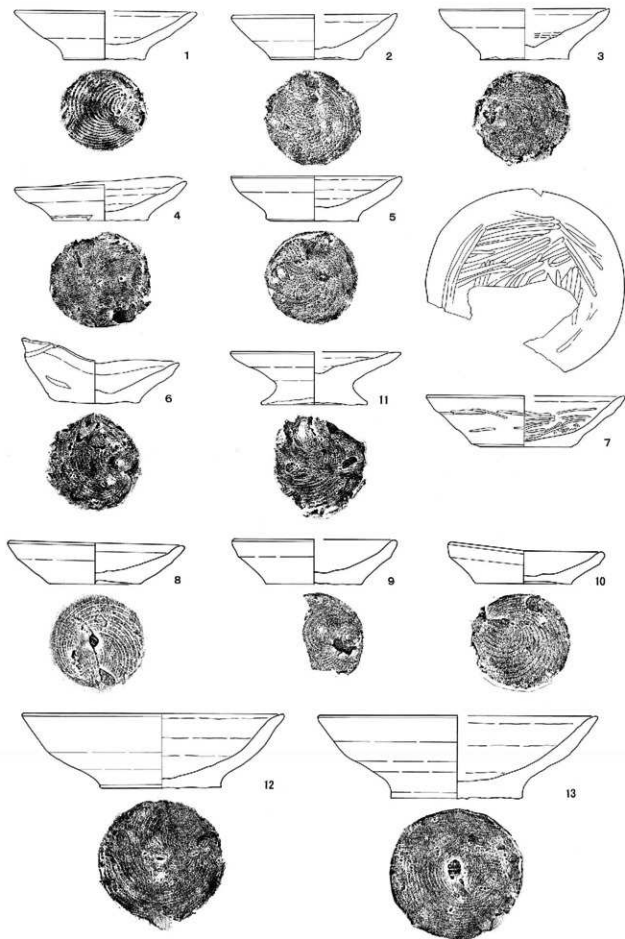
出土遺物は2・6・11・14・20が床面上に廃棄された状態で出土した。9・10・16~18・21は床面上20~25cmの高さの埋積土中より出土したため、住居廃絶後時間をおいた段階で廃棄されたものと考えられる。



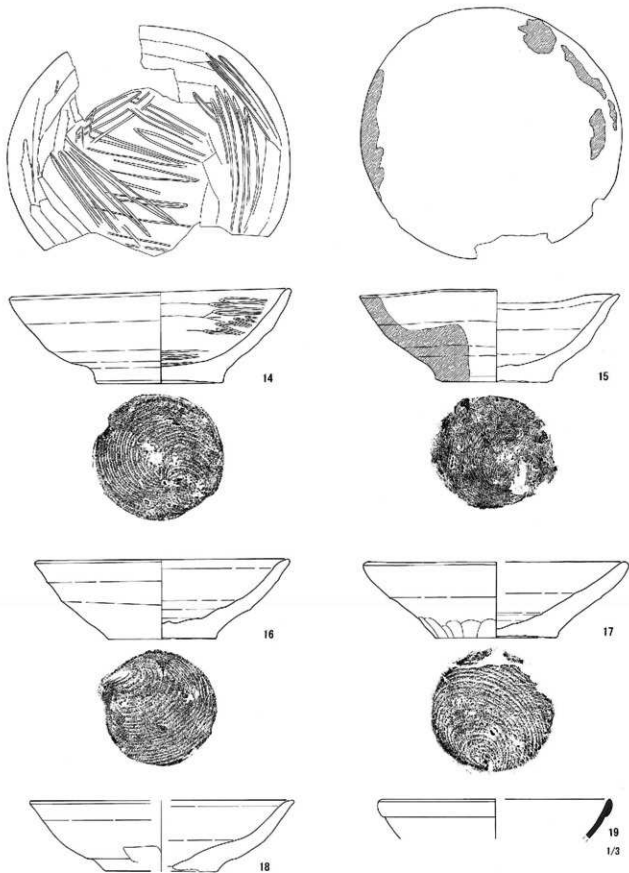
第15図 7号住居跡

7号住居跡

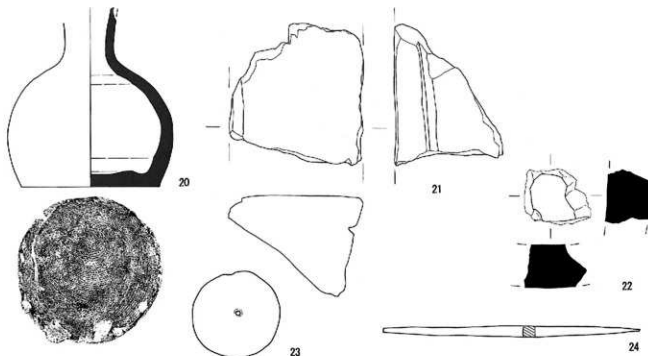
1. 黒褐色土 (練まり中、粘性弱、炭土粒2~3mm散見、灰白色3~5mm少量)
2. 黒褐色土 (練まり弱、粘性弱、灰白色2~3mm・炭化物粒2~3mm・炭褐色土粒2~3mm散見)
3. 暗茶褐色土 (練まり弱、粘性中、炭化物粒2~3mm散見)
4. 黄褐色土 (練まりやや弱い、粘性強、灰白色粒3~5mm少量、円礫5~10cm・炭土粒2~3mm・炭褐色粒1~3mm散見)
5. 黒褐色土 (練まり弱い、粘性中、灰白色粒3~5mm・炭化物2~3mm・炭土粒1~2mm・炭褐色粒1~3mm散見)
6. 暗茶褐色土 (練まりやや弱い、粘性中、灰白色粒3~5mm散見、炭土粒1~5mm・炭褐色粒1~3mm少量)
7. 暗茶褐色土 (練まりやや弱い、粘性中、炭土粒3~5mm少量、炭化物1~3mm、炭褐色粒7粒2~3mm)
8. 暗茶褐色土 (練まりやや弱い、粘性中、炭土粒3~5mm・炭土粒1~2cm・炭褐色粒土粒2~3mm少量、白色粘土粒2~5cm、炭化物粒1~5mm)



第16图 7号住居跡出土遺物(1)



第17图 7号住居跡出土遺物(2)



第18図 7号住居跡出土遺物(3)

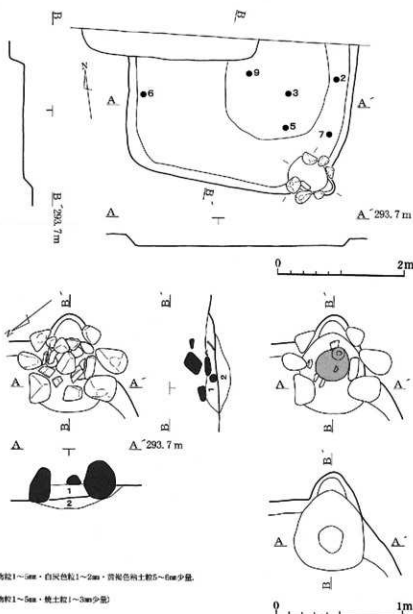
第7表 7号住居跡出土遺物観察表

No	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師質土器・小皿	9.4	4.1	2.6	明赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
2	土師質土器・小皿	8.6	4.8	2.4	にぶい赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
3	土師質土器・小皿	8.9	4.8	2.7	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
4	土師質土器・小皿	8.9	4.9	2.1	にぶい赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
5	土師質土器・小皿	9.0	4.8	2.4	明赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
6	土師質土器・耳皿	8.2	4.5	3.4	明赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕 工具で押した痕
7	土師質土器・小皿	10.2	4.8	2.7	褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 外・内・底部ミガキ 内黒
8	土師質土器・小皿	9.05	4.7	2.25	褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕 内外面一部スス付着
9	土師質土器・小皿	(8.3)	(5.0)	2.35	褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
10	土師質土器・小皿	7.9	5.1	2.15	褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕 内面スス付着
11	土師質土器・小皿	(8.8)	5.4	2.8	灰褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
12	土師質土器・杯	13.8	6.4	4.0	褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
13	土師質土器・杯	14.4	7.0	4.4	にぶい赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
14	土師質土器・杯	14.5	6.4	5.0	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕 内面ミガキ, ヘラなどで
15	土師質土器・杯	13.5	6.2	4.7	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕 ゆがみが大きい 内外面スス付着
16	土師質土器・杯	13.1	5.6	4.2	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
17	土師質土器・杯	13.4	6.4	4.0	にぶい褐色	良	きめが細かい・金雲母・赤色, 白色粒子	ロクロなどで 底部糸切痕 外面下端手持ちヘラケスリ
18	土師質土器・杯	(14.0)	(5.8)	3.8	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで
19	白磁・碗	(18.1)	-	残3.1	灰白色	良	きめが細かい	口縁折り返し ロクロなどで
20	灰釉陶器・壺	-	7.9	残9.5	オリープ灰色	良	きめが細かい	ロクロなどで 底部糸切痕
		全長	幅	厚さ			重さ	
21	礫石	残7.5	残7.0	残5.6	灰色	良		側面に深い溝痕あり
22	瓦	2.9	3.4	2.25		良	15.2g	
23	紡錘車	4.61	4.64	0.49			16.6g	
24	棒状鉄製品	13.51	0.93	0.78				



8号住居跡 (第19・20図、第8表、図版2・4・5・7)

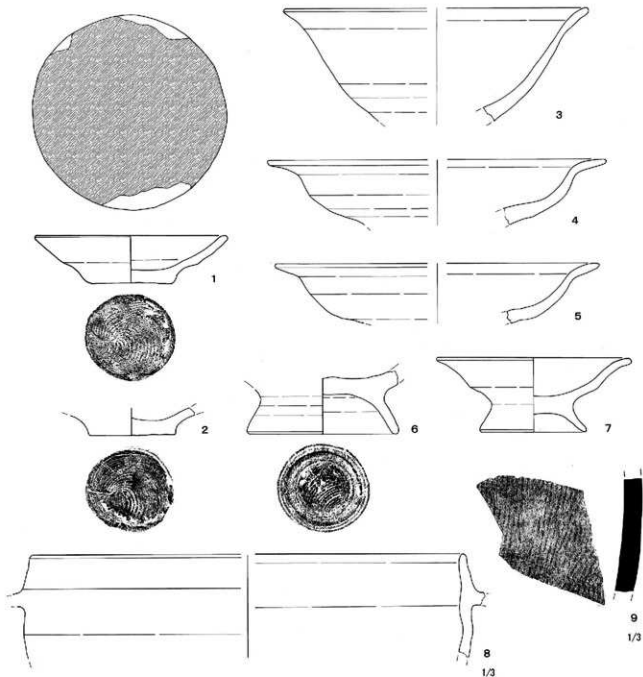
本跡はB区中央付近のE・F・2・3区に位置する。本跡北側は8号土坑により壊されており、西側には10号土坑が隣接している。本跡は南側を確認したが北壁側は調査区外に延びていた。確認できた規模は東西(南壁)3.48×南北(東壁)1.92m程で、平面形は不明である。カマドは住居南東隅に施設されていた。カマドは東壁を30cm程掘り込んで構築しており、規模は幅40、長さ80cm程で径20～30cmの川原石を芯材としていた。火床面からは土師器の塊が出土した。また住居跡東側床に硬化面が、西壁際で金雲母を含む粘土塊がみられた。住居跡の壁高は8～11cm程で床面は平坦で、周溝・柱穴は認められなかった。遺物は土師質土器片が出土した。



8号住居跡カマド

1. 黒褐色土 (跡跡り中、粘性弱、炭化物粒1～2mm・白灰色粒1～2mm・黄褐色粘土粒5～6mm少量、粘土粒1～2mm少量)
2. 黄褐色土 (跡跡り中、粘性弱、炭化物粒1～2mm・粘土粒1～3mm少量)

第19図 8号住居跡



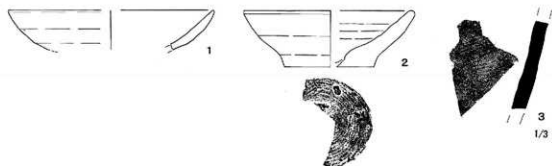
第20図 8号住居跡出土遺物

第8表 8号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師器・かわらけ (社灯明皿)	9.8	4.3	2.6	にぶい橙褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなで 底部糸切痕 内面一部を除き全面にスス付着
2	土師質土器・小皿	-	4.5	残1.4	にぶい褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなで 底部糸切痕
3	土師質土器・坏	(15.8)	-	残6.0	にぶい褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなで
4	土師質土器・皿	(17.6)	-	残3.4	暗褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなで
5	土師質土器・皿	(17.0)	-	残3.2	暗褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなで
6	土師質土器・脚高台杯	-	7.7	残3.3	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなで
7	土師質土器・脚高台杯	10.0	5.4	4.0	にぶい赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなで
8	土師質土器・羽釜	(33.6)	-	残8.2	赤色	良	きめがやや粗・金雲母・長石	ヨコなで 口縁部～羽部にスス付着
9	須恵器・表	-	-	-	赤色	良	きめがやや粗・赤・白色粒子	外面平行タタキ目

9号住居跡 (第8・21図、第9表、図版1・5)

本跡はA区西側のB・4区に位置する。北側は2・3号住居跡と、東側は7号住居跡と重複している。新旧関係は2号住居跡→3号住居跡→9号住居跡→7号住居跡の順で新しくなると考えられる。本跡は北壁と北西隅を確認したが、大部分は調査区外に延びていた。そのため確認できた規模は南北(西壁)0.4×東西(北壁)2.6m程で、平面形は不明である。住居跡の壁高は5~13cm程で床面は平坦で、カマド・周溝・柱穴等は認められなかった。遺物は少量の土師器片が出土した。



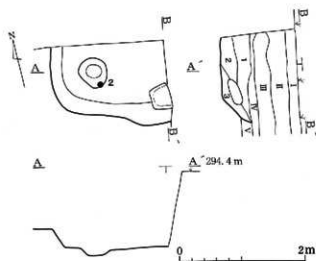
第21図 9号住居跡出土遺物

第9表 9号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師器・皿	(10.6)	-	残2.1	にぶい黄橙色	良	きめが細かい・赤色、黒色粒子、雲母	ロクロなで
2	土師質土器・小皿	(8.7)	(4.8)	3.0	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなで 底部糸切痕
3	須恵器・婁	-	-	残7.7	暗赤灰色	良	きめが細かい	外面タタキ、内面ヘラ整形

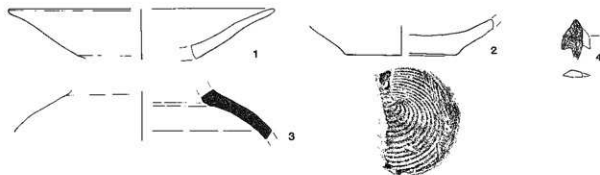
10号住居跡 (第22・23図、第10表、図版9)

本跡はB区中央付近のE・F・4区に位置する。南西隅付近を確認したが、大半は北側の調査区外に延びていた。そのため確認できた規模は南北(西壁)1.08×東西(南壁)1.84m程で、平面形は不明である。住居跡南西隅付近で径48×42、深さ10cm程の小穴を確認した。また南壁際で径40cm程の河原石が出土したが、加工痕等がみられず壁際に在ることから埋没時の流れ込みと思われる。壁高は23~29cm程で、床面は平坦で、カマド・周溝は認められなかった。遺物は少量の土師器片が出土した。



第22図 10号住居跡

1. 暗赤褐色土 (埴土中、粘性强、砂質、汚濁3~10cm・灰白色粒5~6cm・黄褐色粒1~2cm程度)
2. 黒褐色土 (埴土中、粘性强、やや砂質、黄褐色土粒3~6cm少量、汚濁2~3cm・灰白色粒5~6cm・流土粒1~2cm程度)
3. 暗赤褐色土 (埴土中、粘性强、やや砂質、黄褐色土粒2~3cm)



第23図 10号住居跡出土遺物

第10表 10号住居跡出土遺物観察表

No	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	口径	器高				
1	土師器・皿	(13.8)	-	残2.7	黄灰色	良	きめが細かい・金雲母・赤色粒子	外面ヘラ
2	土師器・坏	-	5.8	残1.9	浅黄色	良	きめが細かい・白色粒子・雲母	底部糸切痕
3	灰釉陶器・壺	-	-	残2.6	灰色	良	きめが細かい・石英、黒、白色砂塵	ロクロなで
		全長	幅	厚さ	重さ		石材	
4	石器・石楯	1.9	残1.1	0.5	0.9 g		黒曜石	

11号住居跡 (第24~26図、第11表、図版2・4・7)

本跡はB区西側のE-1・2区に位置する。住居跡の南側を確認したが、北側は調査区外に延びていた。また西側が12号住居跡と重複しており、本跡が古い。確認できた規模は南北(西壁)2.35×東西(調査区北壁)6.75m程で、平面形は不明である。カマドは東壁(カマドA)、南東隅(カマドB)、南西隅(カマドC)の3ヶ所を確認した。いずれのカマドも、造り替えの痕跡がみられないことから、2軒が重複しているとも考えられるが、土層断面の観察ではその痕跡がみられなかった。住居跡南壁で径72×64、深さ35cm程の貯蔵穴と思われる掘り込みを確認し、南西隅のカマドに伴うものと考えられる。また住居跡の中央付近で焼土と炭化物の集中部を確認したが、炉やカマドの痕跡は認められなかった。住居跡の楕高は12~24cm程で床面は平坦で、柱穴・周溝は認められなかった。遺物は土師質土器片が出土した。

東壁のカマド(カマドA)

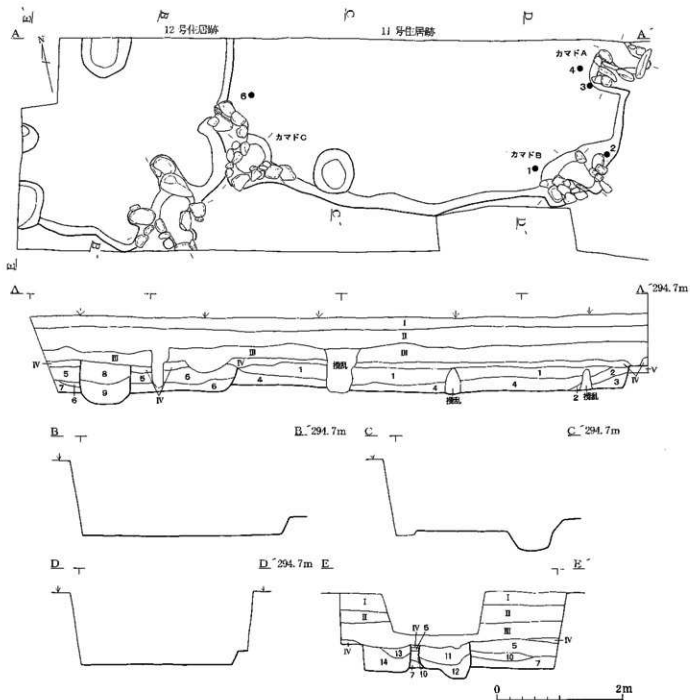
カマドは幅35cm、長さ90cm程で、東壁を20cm程掘り込んで径20~30cm程の河原石を芯材として構築していた。確認できたのは南側のみで、北側は調査区外に延びていた。カマドは廃絶時に壊されており、下層部の構築材や天井石が残存する程度であった。また煙道に天井部の芯材に使われた長さ55、幅15cm程の河原石が残存していた。遺物の出土はみられなかった。

南東隅のカマド(カマドB)

カマドは幅40cm、長さ88cm程で、南東隅を10cm程掘り込んで径20~30cm程の河原石を芯材として構築していた。カマドは廃絶時に壊されており、下層部の構築材が残存する程度であった。遺物の出土はみられなかった。

南西隅のカマド(カマドC)

カマドは幅30cm、長さ91cm程で、南西隅を30cm程掘り込んで径20~30cm程の河原石を芯材として構築していた。カマドは廃絶時に壊されており、下層部の構築材が残存する程度であった。遺物の出土はみられなかった。

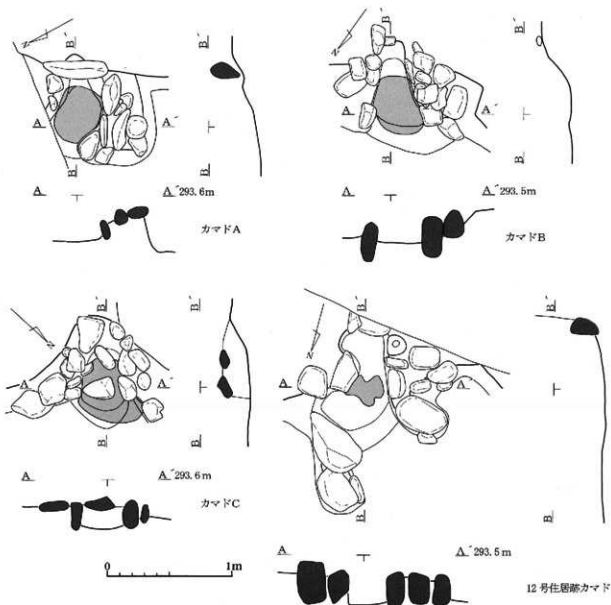


1. 褐色紅色土 (粘まり中, 粘性弱, やや砂質, 灰白色粒1~3mm少量)
2. 茶褐色土 (粘まりやや弱, 粘性弱, やや砂質, 灰白色粒2~5mm少量, 炭化物粒2~3mm・焼土粒1~2mm少量)
3. 黒褐色土 (粘まり弱, 粘性弱, やや砂質, 灰白色粒2~5mm・焼土粒1~2mm少量, 炭化物粒2~5mm少量)
4. 暗茶褐色土 (粘まり中, 粘性弱, やや砂質, 灰白色粒3~5mm・炭化物粒2~3mm・焼土粒3~5mm少量)
5. 茶褐色土 (粘まり中, 粘性弱, やや砂質, 灰白色粒2~3mm少量, 灰褐色粒2~5mm・黄褐色土粒1~2mm少量)
6. 茶褐色土 (粘まり中, 粘性弱, やや砂質, 灰白色粒2~3mm少量, 黄褐色土粒5~6mm・黄褐色土粒1~3mm少量)
7. 黄褐色土 (粘まり中, 粘性あり, 灰白色土粒1~2mm)
8. 暗褐色土 (粘まり中, 粘性弱, やや砂質, 灰白色土粒5~6mm少量, 炭化物粒5~6mm・焼土粒1~2mm少量)
9. 暗茶褐色土 (粘まりやや弱, 粘性弱, やや砂質, 灰白色土粒1~10mm・焼土粒1~3mm・灰白色土粒2~3mm・黄褐色土粒5~6mm少量)
10. 茶褐色土 (粘まり中, やや砂質, 灰白色土粒, 黄褐色土粒5~6mm少量)
11. 暗褐色土 (粘まり中, 粘性弱, やや砂質, 灰白色土粒2~3mm・炭化物粒2~3mm・焼土粒2~3mm少量)
12. 暗茶褐色土 (粘まり中, 粘性弱, やや砂質, 黄褐色土粒2~5mm少量)
13. 暗茶褐色土 (粘まりやや弱, 粘性弱, やや砂質, 灰白色土粒2~3mm少量)
14. 暗茶褐色土 (粘まりやや弱, 粘性弱, やや砂質, 小砂粒2~3mm・黄褐色土粒5~6mm少量, 灰白色土粒5~6mm少量)

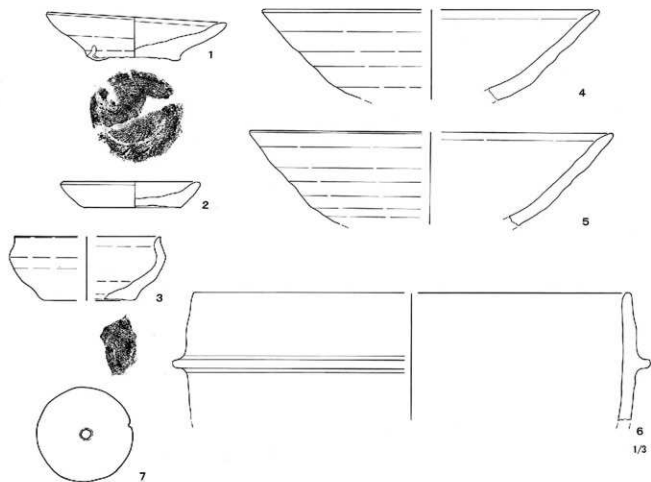
第24図 11・12号住居跡

12号住居跡 (第24・25・27図、第12表、図版2・9)

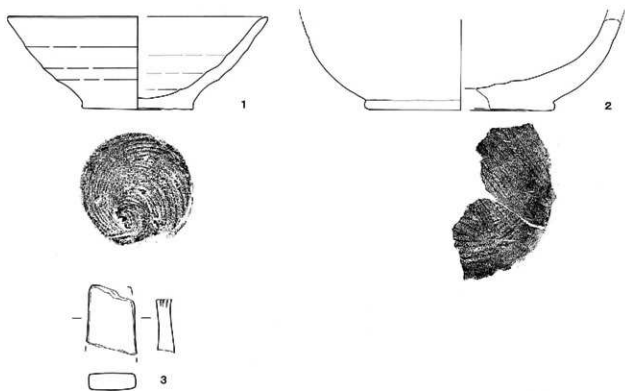
本跡はB区西側のE・0・1区に位置する。住居跡の東側を確認したが、西側と南東隅は調査区外に延びていた。また東側が12号住居跡と重複しており、本跡が新しい。また住居跡西・北側で17～19号土坑が重複するが、いずれも本跡が古い。確認できた規模は南北(西壁)3.45×東西(調査区北壁)2.92m程で、平面形は不明である。カマドは南東隅に施設されていたが、煙道部は調査区外に延びていた。確認できたカマドの規模は幅50cm、長さ100cm程で、南東隅を40cm程掘り込んで径20～30cm程の河原石を芯材として構築していた。カマド東袖では、径56×21cmと大形の河原石が使用されていた。カマドは廃絶時に壊されており、下層部の構築材が残存する程度であった。住居跡の壁高は10～27cm程で床面は平坦で、柱穴・周溝は認められなかった。遺物は土師質土器片が出土した。



第25図 11・12号住居跡カマド



第26図 11号住居跡出土遺物



第27図 12号住居跡出土遺物

第11表 11号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師質土器・小皿	9.3	4.8	2.6	灰褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで 底部糸切痕
2	土師質土器・小皿	6.9	5.0	1.4	褐色	良	きめが細かい・金雲母	底部糸切痕
3	土師器・皿	(7.5)	(4.7)	3.4	黄灰色	良	きめが細かい・赤色粒子・金雲母	内外面ロクロなどで
4	土師質土器・杯	(17.4)	-	残4.8	褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで
5	土師質土器・杯	(18.6)	-	残4.9	にぶい褐色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロなどで
6	土師質土器・羽釜	(34.0)	-	残10.0	褐色	良	きめがやや粗い・金雲母	
		全長	幅	厚さ	重さ			
7	紡錘車	5.17	5.01	0.35	12.2g			

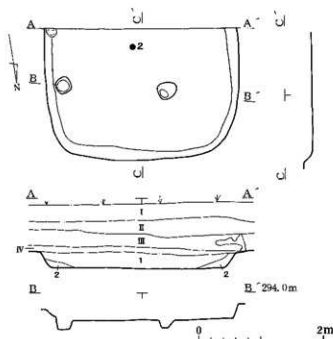
第12表 12号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師質土器・杯	(13.5)	5.75	4.9	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母・白色粒子・石英	底部糸切痕 ロクロなどで
2	土師質土器・大型杯		(10.0)	残4.75	にぶい赤褐色	良	きめが細かい・白色粒子・金雲母	糸きり後みがき
		長	幅	厚さ				
3	砥石	3.6	2.6	0.9	淡茶褐色			断面に擦痕あり

13号住居跡 (第28・29図、第13表、図版2・7)

本跡はA区東側のC-7区に位置する。住居の北側を確認したが、南側は調査区外に延びていた。そのため確認できた規模は南北(西壁)1.98×東北(北壁)2.88m程で、平面形は不明である。住居跡北側で主柱穴2口(西側が径30、深さ11cm、東側が径25、深さ14cm)を確認した。住居跡の壁高は11~23cm程で床面は平坦で、カマド・周溝は認められなかった。また東壁際の川原石は地山の礫層の石である。

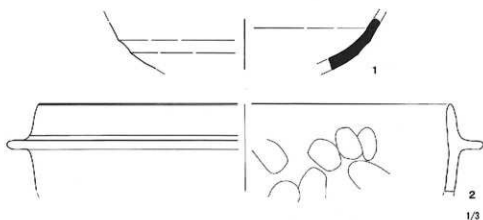
遺物は灰釉陶器碗、土師質土器羽釜が出土した。



1. 灰褐色土 (跡まり中、軟性泥、小砂利5~6mm混入、M口色粒、5~6mm少量、黄褐色土粒5~10mm混入)
2. 暗茶褐色土 (跡まり中、軟性泥、小砂利5~6mm・灰白色粒2~3mm混入)

第28図 13号住居跡





第29図 13号住居跡出土遺物

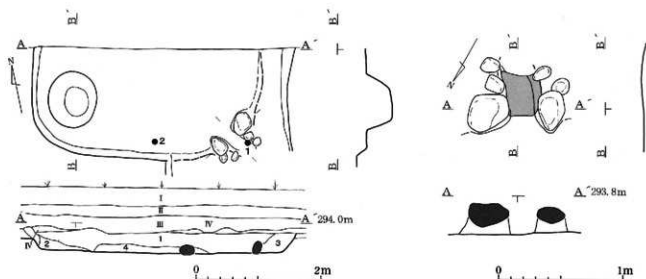
第13表 13号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	灰釉陶器・碗	-	-	残2.65	灰白色	良	きめが細かい 黒色粒子	内面に灰緑色の釉がかかっている
2	土師質土器・羽釜	(32.4)	-	残6.8	暗褐色	良	きめがやや粗い・金雲母	内面に指頭痕

14号住居跡 (第30・31図、第14表、図版2)

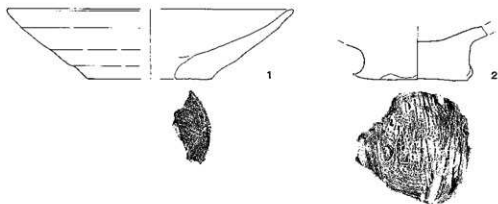
本跡はA区東側のB・8・9区に位置する。住居東側は2号溝と重複し本跡が新しい。住居の南側を確認したが、北側は調査区外に延びていた。そのため確認できた規模は南北(西壁)1.68×東西(南壁)3.6m程で、平面形は不明である。カマドは住居跡の南東隅で施設されていた。カマドは幅75、長さ55cm程で、火床面と構築材の川原石が僅かに残存する程度であった。住居跡の壁高は16~47cm程で床面は平坦で、周溝・柱穴は認められなかった。

遺物は土師質土器環が出土した。



1. 黄褐色土 (跡まわり中、粘粉質、小砂粒5~10mm少量、灰化陶粒2~5cm・円筒2~3cm・黄褐色土塊1~2cm程度、灰白色粒4~5mm)
2. 黄褐色土 (跡まわり中、粘粉質、小砂粒5~5mm・灰白砂粒4~5mm・円筒陶粒2~5cm少量、灰褐色塊1~2cm程度)
3. 黒灰褐色土 (1層上りやや硬い、跡まわりやや硬い、粘粉質、小砂粒5~10mm少量、灰白色粒5~8mm、炭化物表(4~5mm粒))
4. 黄褐色土 (跡まわり中、粘粉質、小砂粒5~8mm少量、灰白色粒4~6mm・黄褐色粒1~2cm程度、黄褐色土塊5~6cm)

第30図 14号住居跡



第31図 14号住居跡出土遺物

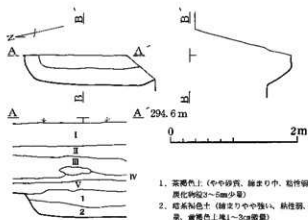
第14表 14号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	上師貫土器・坏	(15.0)	(6.4)	3.7	赤褐色	良	きめが細かい・金雲母	底部ハケ目 ロクロナで
2	土師器・柱状高台付皿	-	(6.0)	残2.9	にぶい赤褐色	良	きめが細かい・金雲母・赤色、白色粒子	底部糸切痕

15号住居跡 (第32図、第15表)

本跡はA区南東端のC-9区に位置する。調査し得たのは住居の北西隅付近の一部分で、大半は調査区外に延びていた。そのため確認できた規模は南北(西壁)2.1×東西(北壁)0.44m程で、平面形は不明である。住居跡の壁高は35~47cm程で床面は平坦で、カマド・周溝・柱穴は認められなかった。

遺物は灰釉陶器が出土した。



1. 灰褐色上 (やや砂質、細まり中、粘性强、小砂粒5~6mm・黄褐色土粒5~6mm程度、灰白色粒2~3mm、炭化物粒3~5mm少量)
2. 褐色褐色土 (細まりやや強い、粘性强、灰白色粒2~3mm、炭化物粒3~10mm、灰褐色土粒5~6mm少量、黄褐色土粒1~3mm程度)

第32図 15号住居跡・出土遺物

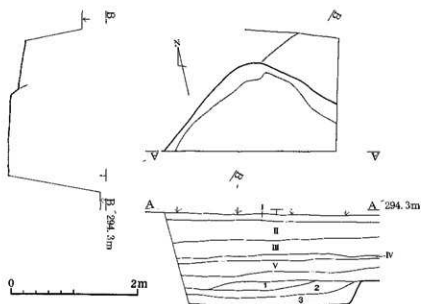
第15表 15号住居跡出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	灰釉陶器	(19.6)	-	残3.5	灰白色	良	きめが細かい	ロクロナで

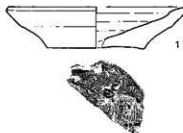
## 2. 竪穴状遺構

### 1号竪穴（第33図、第16表）

本跡はB区東端のG・7・8区に位置する。調査し得たのは遺構の北西隅付近のみで、大半は東側の調査区外に延びていた。そのため確認できた規模は南北(西壁)205×東西(北壁)165cm程で、平面形は不明である。本跡の壁高は36~44cm程で底面は平坦であるが、カマド・周溝・柱穴は認められず住居跡とは断定し難かった。



1. 暗灰褐色土 (粘り中、粘性弱、灰白色粒1~3mm散在、黄褐色粒?~3mm少量)
2. 黄褐色土 (粘り中、粘性弱、灰白色粒2~3mm・黄褐色粒1~3mm散在、黄褐色粒2~3mm)
3. 暗灰褐色土 (粘り中、粘性弱、やや砂質、灰白色粒2~5mm・黄褐色土粒2~3mm少量)



第33図 1号竪穴状遺構・出土遺物

第16表 1号竪穴出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師質土器・小皿	(9.2)	(5.0)	2.2	暗茶褐色	良	きめが細かい・金雲母多量	ロクロなどで 底部糸切痕

### 3. 土坑

#### 1号土坑 (第34図)

本跡はA区中央付近のB-4区に位置する中世の土坑である。規模は南北(中軸線)104×東西(中軸線)105、深さ28cm程で、不整形円の平面である。断面形は逆台形状。遺物の出土はなかった。埋積土は1層 暗灰褐色土、2層 暗茶褐色土、3層 黒褐色土である。

#### 2号土坑 (第34図)

本跡はA区中央付近のB-4区に位置する中世の土坑である。規模は南北(中軸線)86×東西(中軸線)140、深さ14~23cm程で、不整形円の平面である。断面形は逆台形状。底面には小穴が2口(西側が径40、深さ29cm、東側が径25、深さ13cm)みられた。遺物の出土はなかった。埋積土は1層 暗灰褐色土、2層 黄褐色土である。

#### 3号土坑 (第34図、図版3)

本跡はA区中央付近のB-5区に位置する中世の土坑である。規模は東西(中軸線)160×南北(中軸線)91、深さ52~57cm程で、長方形の平面である。断面形は逆台形状。埋積土中から径20cm程の川原石が出土したが土器等の出土はなかった。埋積土は1層 暗灰褐色土、2層 暗灰褐色土(黄褐色土粒含む)、3層 暗茶褐色土、4層 暗灰褐色土(灰白色粒含む)である。

#### 4号土坑 (第34図)

本跡はA区中央付近のB-4・5区に位置する中世の土坑である。規模は南北(中軸線)75×東西(中軸線)45、深さ16cm程で、長方形の平面である。断面形は逆台形状。遺物の出土はなかった。埋積土は1層 暗灰褐色土(黒褐色土粒含む)、2層 暗茶褐色土(灰白色粒含む)である。

#### 5号土坑 (第34図)

本跡はA区中央付近のC-5区に位置する古代の上坑である。確認したのは北側で、南側は調査区外に延びていた。確認した規模は南北(中軸線)45×東西(中軸線)76、深さ20cm程で、円形の平面と思われる。断面形は逆台形状。遺物の出土はなかった。埋積土は1層 暗灰褐色土(黒褐色土少量含む)、2層 暗茶褐色土(灰白色粒2~3mm微量含む)である。

#### 6号土坑 (第34・36図、第17表、図版3・8)

本跡はA区西側のA・B-2区に位置する中世の土坑である。土坑上面や埋積土中には径10~40cm程の川原石が多数みられ、その下で土坑を確認した。規模は南北(中軸線)285×東西(中軸線)139、深さ62~73cm程の長方形の平面で、長軸方位はN-105°-Wである。断面形は逆台形状。遺物は土師質土器小皿、石製の破片が出土した。埋積土は1層 暗灰褐色土(灰白色粒微量含む)、2層 暗茶褐色土(灰白色粒微量含む)、3層 黒褐色土(黄褐色土粒少量含む)、4層 黒褐色土、5層 暗灰褐色土(黒褐色土粒微量含む)、6層 暗黄褐色土(灰白色粒含む)である。

#### 7号土坑

本跡はA区西端のA-1区に位置する中世の土坑で、6号住居跡の埋没後掘り込まれていた。確認できたのは土坑の断面のみで、土坑西側と北側は調査外に延びていた。土坑底面は住居跡の床面ほぼ同じ高さに掘り込まれていた。確認した規模は南北(調査区西壁断面)280、深さ30cm程で、平面は不明であるが6・15号土坑と同様な長方形と思われる。断面形は皿状で埋積土中には河原石がみられなかったが人為的堆積と思われる。遺物の出土はなかった。

#### 8号土坑 (第34・36図、第18表)

本跡はB区西側のE・2・3区に位置する古代の上坑である。土坑の南側を確認したが、北側は調査区外に延びていた。8号住居跡を壊して掘り込まれている。規模は南北(中軸)38×東西(調査区北壁)280、深さ25～29cm程で、平面は不明であるが方形ないし長方形と思われる。断面形は逆台形状で埋積土には径20～40cmの大形の河原石が混入しており人為的堆積と思われる。埋積土は1層 暗茶褐色土(灰白色粒含む)、2層 明黒褐色土(黄褐色土塊微量含む)である。遺物の出土は土師質土器小皿・鉢の破片が出土した。

#### 9号土坑 (第34図)

本跡はB区中央付近のF・4区に位置し、10号住居跡の南側に隣接している。規模は南北(中軸)138×東西(中軸)119、深さ6～9cm程で、平面は不整形である。断面形は皿状で埋積土は自然堆積であった。遺物の出土はなかった。時期は古代と思われる。

#### 10号土坑 (第34図)

本跡はB区西側のE・2区に位置し、8号住居跡の西側に隣接している。規模は南北(中軸)86×東西(中軸)91、深さ22～30cm程で、平面は不整形である。断面形は皿状で埋積土は自然堆積であった。遺物の出土はなかった。時期は古代と思われる。

#### 11号土坑 (第34図)

本跡はB区東側のF・7区に位置し12号土坑の南西側に隣接する古代の土坑である。土坑の南側は調査区外に延びていた。確認できた規模は南北(中軸)94×東西(調査区南壁)118、深さ47cm程で、平面は不明であるが長方形ないし方形と思われる。この土坑は中世の層と考えられる暗灰色層上面から掘り込んでいるが、埋積土中から数点の土師器片が出土するため時期は古代(平安時代)とした。断面形は逆台形状。遺物は数点の土師質土器片が出土した。埋積土は1層 暗茶褐色土(灰白色粒微量含む)、2層 暗茶褐色土(黄褐色土粒少量含む)、3層 暗黄色土(黄褐色土塊含む)である。

#### 12号土坑 (第34・36図、第19表)

本跡はB区東側のF・7区に位置し11号土坑の北東側に隣接する中世の土坑である。土坑の南側は攪乱をうけ、北端は調査区外に延びていた。確認できた規模は南北(中軸)76×東西(中軸)60、深さ29cm程で、平面は楕円形である。断面形は逆台形。遺物は碁石?が出土した。埋積土は暗茶褐色土である。

#### 13号土坑 (第34図)

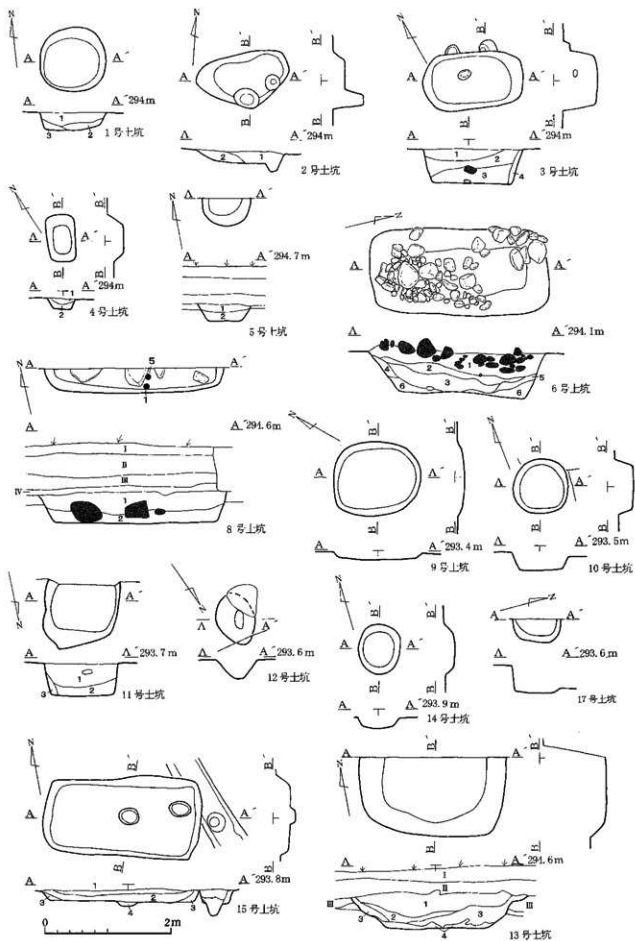
本跡はA区東側のB・7区に位置する古代の上坑である。土坑の南側を確認したが、北側は調査区外に延びていた。規模は南北(西壁)98×東西(南壁)220、深さ19～24cm程で、平面は方形ないし長方形と思われる。断面形は逆台形状。遺物の出土はなかった。埋積土は1層 暗茶褐色土(小砂り多量含む)、2層 茶褐色土(灰白色粒少量含む)、3層 灰色砂、4層 暗茶褐色土(灰白色粒微量含む)である。

#### 14号土坑 (第34図)

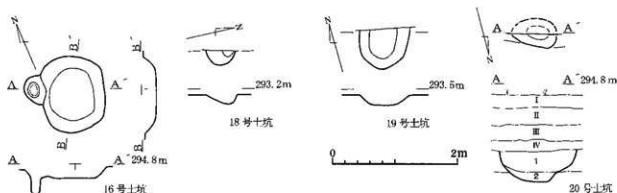
本跡はA区東側のB・7区に位置する。規模は南北81×東西64、深さ17cm程で、不整形楕円形の平面である。断面形は逆台形状で埋積土は自然堆積であった。遺物の出土はなかった。

#### 15号土坑 (第34・36図、第20表、図版3・9)

本跡はA区東側のC・7・8区に位置する。規模は南北(西壁)114×東西(南壁)241、深さ14～23cm程の長方形の平面で、長軸方位はN・76°・Wである。断面形は逆台形状で、平坦な底面には小穴2口(西側が径30、深さ7、東側



第34图 土坑 (1)



第35図 土坑 (2)

が径34、深さ30cm)がみられ、埋積土は人為的堆積であった。遺物は土師器片が少量出土した。6・8号土坑と形状が類似することから、中世の土坑と思われる。埋積土は1層 暗褐色土 (灰白色粒微量含む)、2層 暗茶褐色土 (黄褐色土塊含む)、3層 暗黄褐色土 (灰白色粒少量含む)、4層褐色土である。

#### 16号土坑 (第35図)

本跡はA区東側のB・8区に位置する古代の土坑である。規模は南北123×東西99、深さ19cm程で、不整形円形の平面である。西壁がピットと重複するが、本跡が古い。断面形は逆台形状で埋積土は自然堆積であった。遺物は土師質土器片が少量出土した。

#### 17号土坑 (第34図)

本跡はB区西側のE・0区に位置し12号住居跡を壊して掘り込まれた中世の土坑である。土坑の西側は調査区外に延びていた。確認できた規模は南北(調査区西壁)79×東西(中軸)40、深さ7cm程で、平面は楕円形と思われる。土層断面の観察では、深さ44cmと深く掘り込まれていた。断面形は円筒状で埋積土は人為的堆積と考えられる。遺物の出土はなかった。

#### 18号土坑 (第35図)

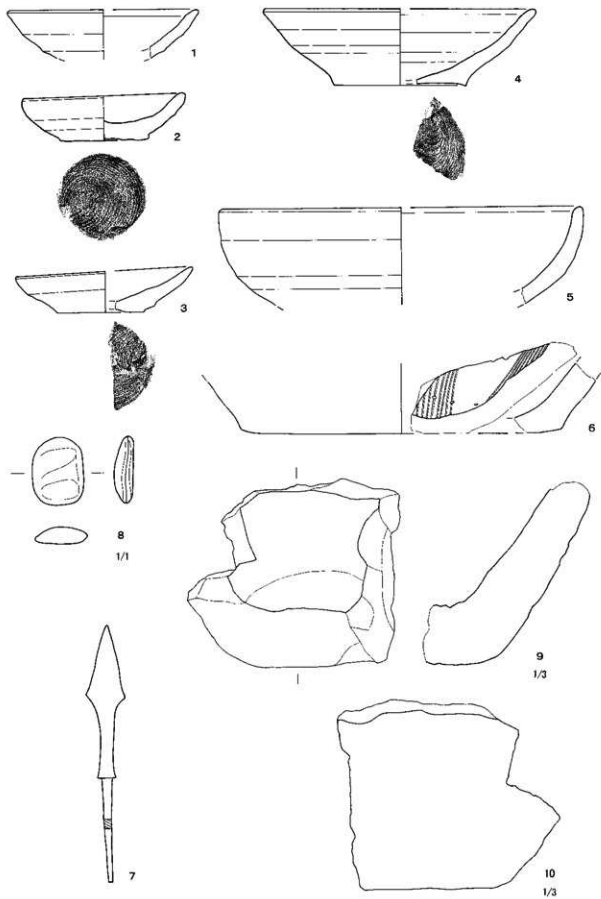
本跡はB区西側のE・0区に位置し12号住居跡を壊して掘り込まれた中世の土坑である。土坑の西側は調査区外に延びていた。確認できた規模は南北(調査区西壁)50×東西(中軸)24、深さ17cm程で、平面は楕円形と思われる。上層断面の観察では、深さ60cmと深く掘り込まれていた。断面形は円筒状で埋積土は人為的堆積と考えられる。遺物の出土はなかった。

#### 19号土坑 (第35図)

本跡はB区西側のE・0・1区に位置し12号住居跡を壊して掘り込まれた中世の土坑である。土坑の北側は調査区外に延びていた。確認できた規模は南北(中軸)66×東西(調査区北壁)80、深さ16cm程で、平面は楕円形と思われる。土層断面の観察では、確認面から深さ68cmと深く掘り込まれていた。断面形は円筒状で埋積土は人為的堆積と考えられる。遺物の出土はなかった。

#### 20号土坑 (第35・36図、第21表、図版4)

本跡はA区西側のB・4区に位置し、9号住居跡を切る中世の土坑である。確認できた規模は南北20×東西70、深さ45cm程で、平面は不明であるが楕円ないし円形と思われる。断面形は逆台形状であった。遺物は土師質土器小皿・杯が出土した。埋積土は1層 暗茶褐色土 (灰白色粒微量含む)、2層 暗茶褐色土 (灰白色粒・黄褐色土粒少量含む) である。



第36圖 土坑出土遺物



第17表 6号土坑出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
3	土師質土器・小皿	(9.1)	(1.4)	2.4	暗茶褐色	良好	きめが細かい・金雲母	ロクロナで 底部糸切痕
6	土器・播鉢		(16.8)	残3.7	暗灰色	良		
9	石製品・臼			残13.3	灰白色			内面全体が磨れている
10	石製品							

第18表 8号土坑出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師質土器・小皿	(9.8)		残2.6	黒茶褐色	良	きめが細かい・金雲母	
5	土師質土器・鉢	(18.6)		残5.1	淡茶褐色	良	きめが細かい・金雲母・長石	

第19表 12号土坑出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		長	幅	厚さ				
8	礫石?	1.8	1.3	0.5	黒色			

第20表 15号土坑出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			重さ	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		長	幅	厚さ				
7	鉄鏝	13.8	2.05	1.12	18.5g			

第21表 20号土坑出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
2	土師質土器・小皿	8.4	4.6	2.45	暗茶褐色	良	きめが細かい・金雲母多量	ロクロナで 底部糸切痕
4	土師質土器・杯	(14.0)	(6.8)	4.1	暗茶褐色	良	きめが細かい・金雲母多量	ロクロナで 底部糸切痕

## 4. 溝

## 1号溝 (第37図、図版3)

本跡はA区東側のB・C・8区に位置し南東-北西方向に直線状に延びる。本跡の中央付近で15号土坑と重複しており、土層断面の観察によれば本跡が古い。規模は長さ7.2m、幅が北側41cm、中央56cm、南側52cm、深さは11~31cmで南に向かって深くなっている。底面には小穴(径30×26、深さ18cm)が1口みられた。本跡は水路とも思われたが、埋積土は自然堆積で流水等の痕跡は認められなかった。

遺物の出土はみられなかった。

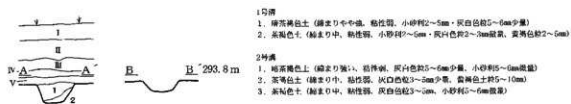
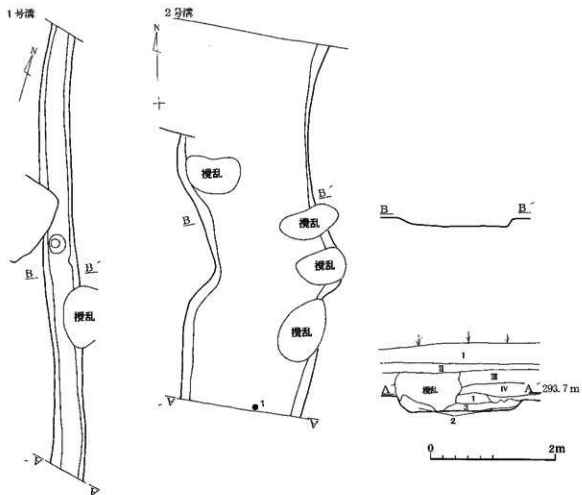
## 2号溝 (第37・38図、第22表、図版7)

本跡はA区東端のB・C・9区に位置し南北方向に延びている。本跡の北側で14号住居跡と重複しており、土層断面の観察によれば本跡が古い。規模は長さ6.02m、幅が中央185、南側195cm、深さは11~21cmである。埋積土は自然堆積で、流水等の痕跡は認められなかった。

遺物は須恵器片が出上した。

第22表 2号溝出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師質土器・小皿		(6.2)	残2.0	茶色	良	きめが細かい・金雲母	ロクロナで 底部糸切痕
2	須恵器・甕			残11.4	内面灰色 外面灰白色	良	滑	外面タタキ目



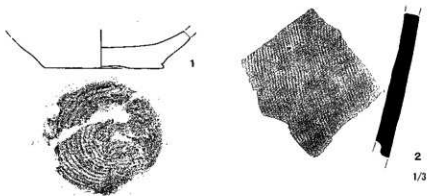
1号溝

1. 暗茶褐色土 (粘まりやや強、粘性弱、小砂粒2~5mm・灰白色粒5~6mm少量)
2. 茶褐色土 (粘まり中、粘性弱、小砂粒2~5mm・灰白色粒2~3mm散在、黄褐色粒2~5mm)

2号溝

1. 暗茶褐色土 (粘まり強)、粘性强、灰白色粒5~6mm少量、小砂粒5~6mm散在)
2. 茶褐色土 (粘まり中、粘性弱、灰白色粒3~5mm少量、黄褐色土粒5~10mm)
3. 茶褐色土 (粘まり中、粘性弱、灰白色粒3~5mm、小砂粒5~6mm散在)

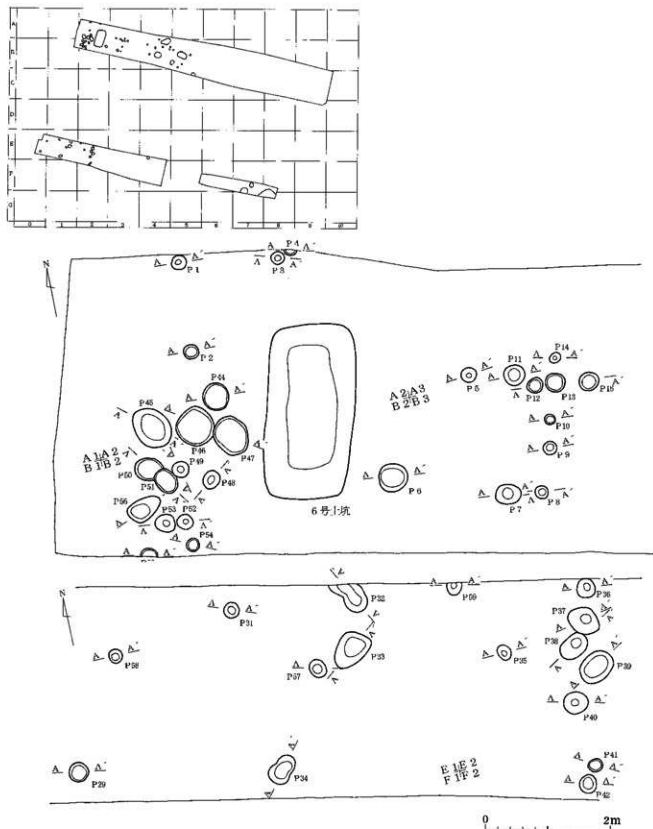
第37図 1・2号溝



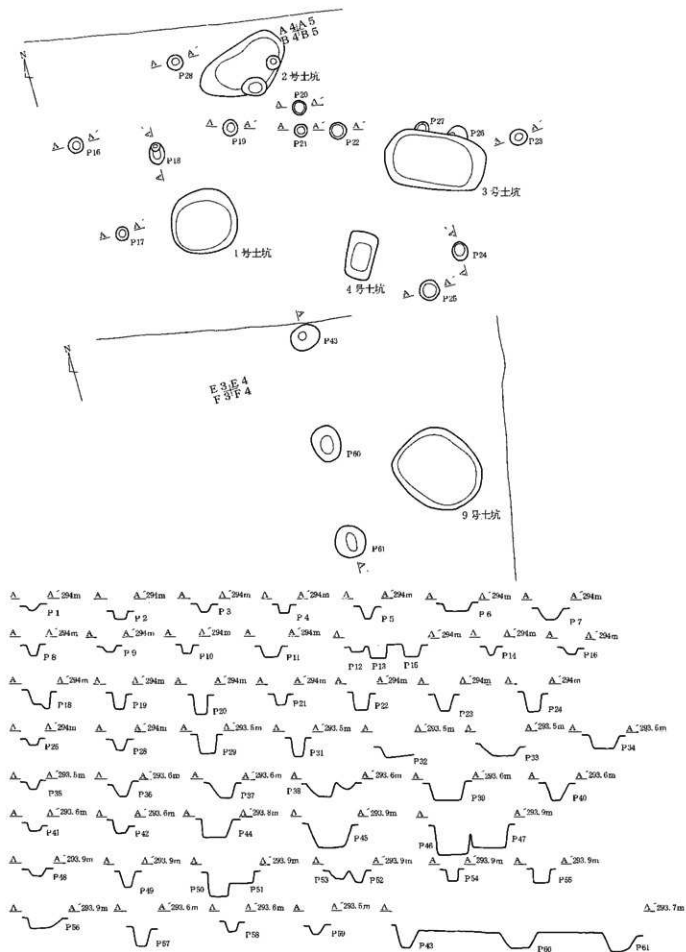
第38図 2号溝出土遺物

### 5. ビット群 (第39・40図、第23表)

今次調査区からは平安時代の遺構確認面の上面で、中世の遺構確認面を確認することができた。中世の遺構確認面では土坑 (6号土坑) を含む多数のビット群を確認した。しかし、建物の復元には至らなかったため、集中区ごとの平面図を図示し、その詳細については一覧表 (第23表) に表した。



第39図 ビット群 (1)

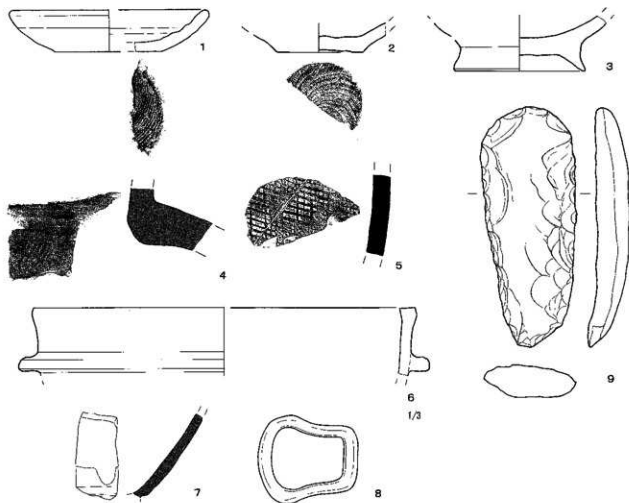


第23表 ビット計測表

No.	地区	グリット	規模 (径) cm	深さ cm	埋 積 土	備 考
1	A	A2	25	7	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm) 混入	
2	A	A2	24	13	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	
3	A	A2	21	12	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	
4	A	A2	20	13	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm) 混入	北端は調査区外
5	A	A3	27	22	灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色粒 (5~6mm) 少量	
6	A	B2	48	8	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	
7	A	B3	40×34	18	灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色粒 (5~6mm) 少量	
8	A	B3	21	18	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	
9	A	B3	23	8	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm) 混入	
10	A	B3	18	14	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	
11	A	A3&B3	25	17	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	
12	A	B3	24	9	灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色粒 (5~6mm) 少量	
13	A	B3	29	21	暗灰褐色土・灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (2~3mm) 少量	
14	A	B3	19	15	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm) 混入	
15	A	B3	30	17	暗灰褐色土・灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (2~3mm) 少量	
16	A	B4	27	12	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	
17	A	B4	20	24	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm) 混入	
18	A	B4	37×27	30	灰褐色土・灰白色粒 (2~3mm)、灰褐色粘土粒 (5~6mm) 微量	
19	A	B4	27	25	灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色土粒 (3~4mm) 微量	
20	A	B4	23	31	暗灰褐色土・灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (2~3mm) 少量	
21	A	B4	22	18	暗灰褐色土・灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (2~3mm) 少量	
22	A	B5	28	28	暗灰褐色土・灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (2~3mm) 少量	
23	A	B5	30	27	灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色粒 (5~6mm) 少量	
24	A	B5	29	31	灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色粒 (5~6mm) 少量	
25	A	B5	34	11	灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色粒 (5~6mm) 少量	
26	A	B5	32	26	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	SK3と重複
27	A	B5	20	11	暗灰褐色土・砂粒少量、灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	SK3と重複
28	A	B4	25	16	暗灰褐色土・灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (2~3mm) 少量	
29	B	E0	32	28	暗灰褐色土・灰白色粒 (2~4mm)	
30						欠番
31	B	E1	25	29	暗灰褐色土・灰白色粒 (1~3mm)、黒褐色粒 (4~5mm) 少量	
32	B	F1	52×36	19	暗灰褐色土・灰白色粒 (2~3mm)、黄褐色粒 (1~2mm) 微量	北端は調査区外
33	B	E1	63×45	19	暗灰茶褐色土・灰白色粒 (2~4mm) 微量	
34	B	F1	49×36	23	暗灰褐色土・白色粒 (2~4mm)、黄褐色粒 (1~2mm) 微量	
35	B	E2	25	16	暗灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色粒 (4~6mm) 微量	
36	B	F2	30	23	暗灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色粒 (3~4mm) 少量	北端は調査区外
37	B	E2	54×41	24	暗灰褐色土・灰白色粒 (2~4mm)、黒褐色粒少量	
38	B	F2	47×33	22	暗灰褐色土・灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色土粒 (3~6mm) 少量	
39	B	E2	57×45	27	暗灰褐色土・灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色粒少量	
40	B	F2	39	27	暗灰褐色土	
41	B	F2	23	11	暗茶褐色土・灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色粒微量	
42	B	F2	32	17	暗茶褐色土・灰白色粒 (2~3mm)、黒褐色粒少量	
43	B	E4	50×39	30	暗茶褐色土・灰白色 (3~4mm)、黄褐色塊微量	43同一のビットか?
44	A	A2	46	30	暗灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色土粒 (5~7mm) 少量	
45	A	A2	72×55	36	暗灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 少量	
46	A	A2	59	50	暗灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	47と重複
47	A	B1&2	64×55	38	暗灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm) 微量	46と重複
48	A	F2	27	11	灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色粒 (5~6mm) 微量	
49	A	B2	27	26	灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色粒 (5~6mm) 微量	
50	A	B2	38	39	暗灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm) 微量	51と重複
51	A	B2	32×40	19	暗灰褐色土・灰白色粒、黒褐色土塊微量	50と重複
52	A	B2	27	19	暗灰褐色土・灰白色粒、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	
53	A	B2	32	14	灰褐色土・灰白色粒 (1~3mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 少量	
54	A	B2	23	18	暗灰褐色土・灰白色粒、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	
55	A	B2	27	21	暗灰褐色土・灰白色粒、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	南端は調査区外
56	A	F2	55×33	17	灰褐色土・灰白色粒 (1~3mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 少量	
57	B	E1	31	30	暗灰褐色土・灰白色粒、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	
58	B	F1	21	15	暗灰褐色土・灰白色粒 (1~2mm)、黒褐色土粒 (5~6mm) 微量	
59	B	E1	26	13	暗灰褐色土・黒褐色土粒 (5~10mm) 少量	北端は調査区外
60	B	F4	59×45	25	黒褐色土・黄褐色土塊 (1~2cm) 微量	
61	B	F4	51	29	赤褐色土	

## 6. 遺構外出土遺物 (第41図、第24表、図版7~9)

遺構外出土のもので、重要と思われるものについては一括して図示し、その詳細については観察表(第24表)に示した。



第41図 遺構外出土遺物

第24表 遺構外出土遺物観察表

No.	種別・器種	寸法 (cm)			色調	焼成	胎土	器形・調整の特徴
		口径	底径	器高				
1	土師質土器・小皿	(10.0)	(5.6)	2.2	淡茶色	良	きめが細かい・金雲母、赤色粒子	ロクロなので 底部糸切痕
2	土師質土器・小皿		(4.5)	残1.55	暗茶褐色	良	きめが細かい・金雲母多量	ロクロなので 底部糸切痕
3	土師質土器・脚高台杯		6.8	残2.9	茶褐色	良	きめが細かい・金雲母多量	見込み部に爪のあとあり
4	中世陶器(渥美)・甕			残3.3	灰茶色	良		外面平行タタキ目
5	須恵器・甕			残4.1	黒灰色	良	密	外面格子タタキ目
6	土師器・羽釜	(29.8)		残5.4	暗茶褐色	良	長石	
7	陶器茶碗					良	きめが細かい 白色、黒色砂粒	鉄釉
		全長	幅	厚さ	重さ			
8	絞具	5.36	4.74	1.02	2.92g			
9	石斧	12.6	5.0	1.7				

### 第3章 まとめ

今次調査で検出した遺構は住居跡13軒、土坑19口、溝2条、ピット群である。

住居跡は全体を調査し得たものはなかった。しかし、調査区の西側に集中して認められ、A区では1～7・9号住居跡、B区では8・11・12号住居跡が重複していた。また、A区東側の住居跡13・14号住居跡（辺約3m）に比べ、規模も大きく、調査区内ではその形状を判断できるものは少なかった。このことにより、集落は西側に偏在しているものと考えられる。

住居跡でカマドを確認できたものは、5・7・8・11・12・14号住居跡の6軒である。11号住居跡の東カマドを除くと、いずれも住居跡のコーナーにカマドを施設している。11号住居跡では3ヶ所のカマドを確認できた。しかし南西隅のカマドのみは、貯蔵穴が隣接することから、他の2ヶ所とは別の住居跡の可能性が考えられる。しかし、調査区北壁の土層断面では12号住居跡以外の住居跡との切り合いの痕跡は認められなかった。そのため3ヶ所のカマドが同時に使用された可能性もあるが、小形の住居跡の重複も考えられる。

ピットと土坑は中世の包含層とされる層(暗灰褐色土)から掘り込まれており、時期も当該期にあたると思われる。ピットはいずれも径20～30、深さ10～20cmのものが主体で、調査区の西側に多くみられた。土坑も同様に掘り込まれており、遺物が伴わないものの、中～近世に属するものと思われる。土層断面の観察により、土坑は50～60cmの深さで掘り込まれている。6・8・15号土坑などはその形状から墓坑であると考えられる。

また、P43、P60、P61は直線に並び間隔が1.8+1.65mであるため、掘立柱建物跡の可能性もあるも、埋積土は裏込めのような締まった土ではなかった。

溝は2条検出したがいずれも流水等の痕跡がみられず、地山自体も砂質であることから水路等ではなく区画溝として使われたものと思われる。

遺物は下記表に示した如く、住居跡においては3～7号住居跡から出土したものが、上師質土器杯・小皿を主体として纏まりを持って出土している。それに伴って、柱状高台杯・小皿・灰軸陶器・白磁などが出土している。これらの住居跡は重複が激しく、遺物は個々の住居跡に伴うものは少なく、出土状況から廃棄されたものと考えられる。遺構の年代は11～12世紀代と考えられる。

今次調査の結果、古代木の遺構が纏まって確認されたことは、従来の調査では確認出来なかった当該期の集落が今次調査区周辺に位置しているものと考えられる。また、古代に引き続く中世においては、確認できた遺構が土坑・ピットのみであり、遺物も僅かばかりであったことから、今後、松ノ尾遺跡での中世の在り方を検討する余地を残したといえよう。

第25表 住居跡出土物の属性

No.	土師器				上師質土器				須恵器	中世陶器	白磁	金属製品
	杯	小皿	脚高台杯	羽釜	杯	小皿	柱状高台杯	柱状高台小皿				
1号住居			●	●		●		●		●		
2号住居	●	●	●							●	●	耳梨・棒状鉄製品
3号住居					●	●						
4号住居		●			●	●	●			●		
5号住居								●	●		●	釘
6号住居					●	●		●		●	●	
7号住居					●	●				●	●	紡錘車・棒状品
8号住居		●	●	●					●			
9号住居		●				●			●			
10号住居	●									●		
11号住居					●	●						紡錘車
12号住居					●							
13号住居				●						●		
14号住居					●			●				
15号住居										●		



A区全景 (東から)



A区全景 (西から)



B区全景 (西から)



A区全景 (北東から)



3・9号住居跡全景 (北東から)



4号住居跡全景 (北から)



5・6号住居跡全景 (西から)



7号住居跡全景 (北から)





8号住居跡全景（西から）



11号住居跡全景（西から）



12号住居跡全景（西から）



13号住居跡全景（北から）



14号住居跡全景（南から）



8号住居跡カマド（北東から）



11号住居跡カマドC（東から）



12号住居跡カマド（北から）



4号住居跡遺物出土状況（西から）



4号住居跡遺物出土状況（南から）



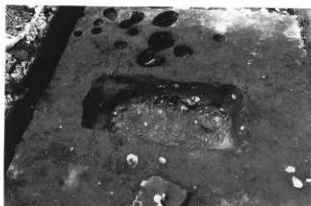
5号住居跡遺物出土状況（北から）



7号住居跡遺物出土状況（北から）



3号土坑全景（北から）



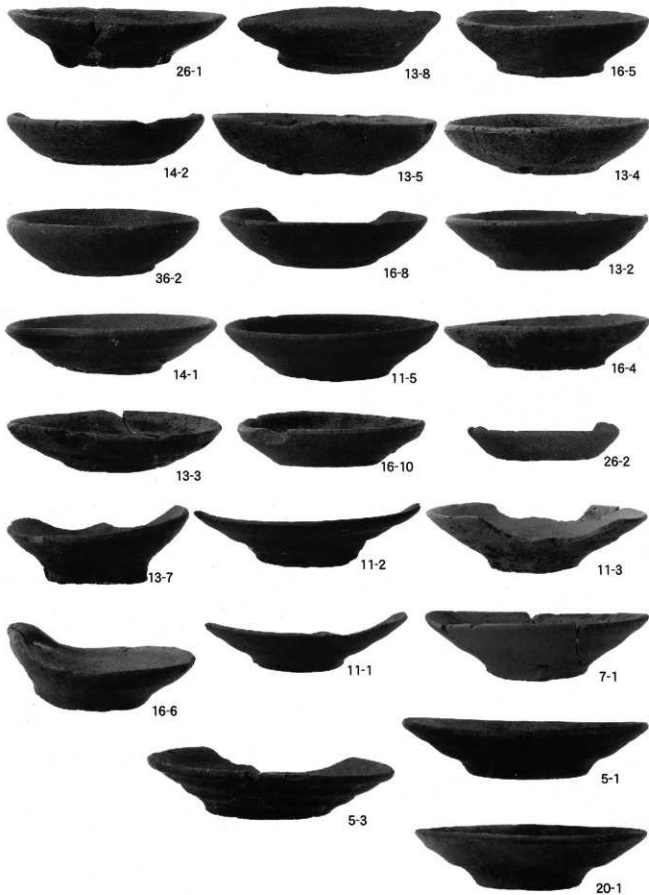
6号土坑全景（東から）



15号土坑全景（北から）



1号溝全景（南から）





9-2



17-17



11-7



17-16



14-6



17-15



5-5



16-12



13-9



5-7



5-8



5-6



16-11



14-8



14-7



20-7



11-8

1・3・4～9号住居跡出土遺物



5-9



11-9



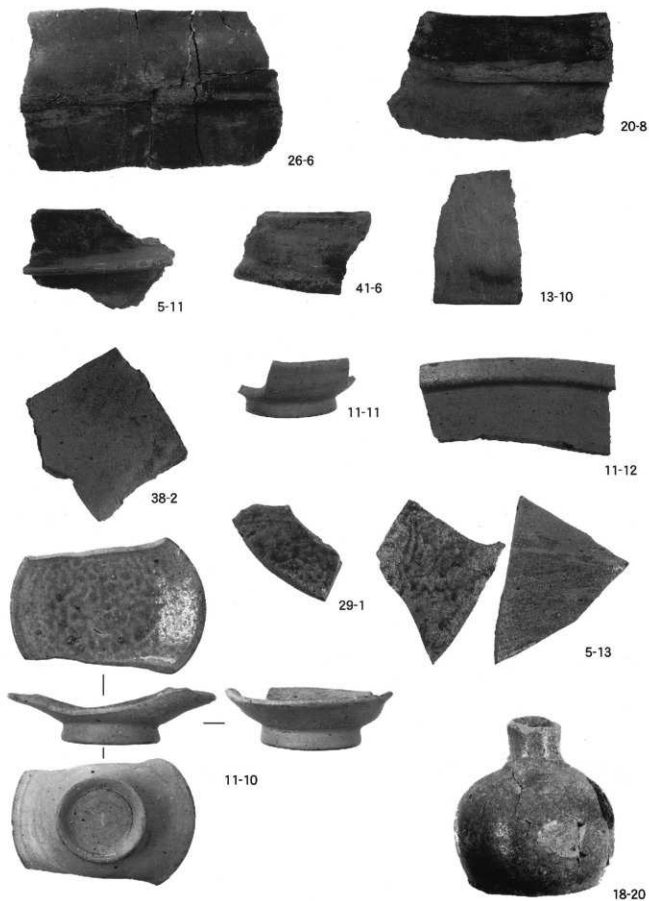
5-10



16-7



17-14





14-10



5-12



41-4



36-6



18-21



11-13

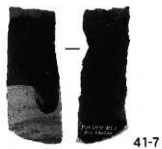
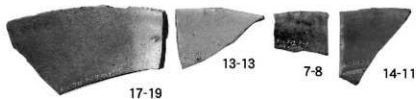


41-9



36-9

1・4・6・7号住居跡、6号土坑、遺構外出土遺物



2・5～7・10・12号住居跡、15号土坑、遺構外出土遺物



## 報告書抄録

ふりがな	まつのおいせき							
書名	松ノ尾遺跡11							
副書名								
巻次								
シリーズ名	甲斐市文化財調査報告							
シリーズ番号	6							
編著者名	中山哲也・三輪孝幸・大冨正之							
編集機関	甲斐市教育委員会							
所在地	山梨県甲斐市下今井236-2							
発行年月日	平成18年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯・東経		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
まつのおいせき 松ノ尾遺跡	山梨県 甲斐市 中下条 1467-1・ 3・4 1471-1	19210	敷-18			平成16年 6月10日～ 平成16年 7月15日	597	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
松ノ尾遺跡	集落	平安時代	竪穴住居跡 土坑 溝	土師器 須志器 灰釉陶器 土師質土器 瓦 白磁 金属製品	平安時代後期の集落			

### 甲斐市文化財調査報告 第6集

## 松ノ尾遺跡 11

発行日 2006年(H18)3月31日  
 発行 甲斐市教育委員会  
 山梨県甲斐市下今井236-2  
 印刷 株式会社 峽南堂印刷所

